

東洋大学共生思想研究センター編
共生思想研究年報 2010
平成 23 年 3 月 31 日発行

「宗教と環境——地球社会の共生を求めて」シンポジウム

山本 良一	東京大学名誉教授
藪田 稔	京都大学名誉教授
原井 慈鳳	法華宗菩薩行研究所所長
深田伊佐夫	立正佼成会中央学術研究所研究員
山岡 睦治	宗教法人「生長の家」出版・広報部部长
桑折 範彦	徳島大学名誉教授・目白大学教授・日本聖公会員
内藤 欽風	エコロジスト／シンプルライフ普及センター設立発起人代表
竹村 牧男	東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻教授

主催：

東洋大学共生思想研究センター
宗教・研究者エコイニシアティブ

(2010年11月6日於東洋大学白山校舎6号館2階6210教室開催)

低炭素革命の成否と人類の未来

—宗教に期待するもの

山本 良一

まず、このたび、こういう大変ユニークな、しかも非常に意義のあるシンポジウムを企画・準備していただきました東洋大学の関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。私の話は、まさに科学、技術、経済という自制心の全く働いていない3分野を代表して、いま世界の現状はどうなっているか、我々はどのような活動をしているか、皆様に紹介したいと思います。

科学、技術、経済は、まさに宗教、道徳、倫理の絶大なる支援を必要としている。我々は持てる力のすべてを挙げ、今の危機に対処しなければいけないということをお話ししたいわけです。その危機は恐らく20年たてば確実に来ますが、早ければ3年後から始まると科学者は考えているわけです。

そこで、まず、これは私が読んだある本に紹介されていることですが、マザー・テレサがまだ存命のころ、イギリスのオックスフォード大学で講演会があり、ガイア仮説で有名なジェームズ・ラブロック博士がその講演会に出席され、最前列で聴講されたそうです。マザー・テレサはいつものように、「病める人、貧しい人の世話をしなさい。地球のことは神に任せて」とおっしゃったそうです。それに対し、ラブロックは最前列に座っていて突然立ち上がり、次のように言ったそうです。「聖女様、私の意見は違います。私たちがガイア、すなわち地球生命圏の世話をしなければ、ガイアは私たちを取り除いてしまうでしょう」。

宗教は言うまでもなく、生老病死、人生いかに生きるか、生きるべきかを説くものですが、今日それでは不十分だ。宗教は一人の人間がいかに生きるべきかだけでなく、地球生命圏全体のことをもう一つ心配し、それに対して貢献する、管理する、あるいは修復することもやっていたらかなければいけない時に来たという認識です。もちろんこれはマザー・テレサの意見を聞いたわけではないのですが、ラブロックは科学者としてそういう意見を表明したわけです。

これは毎日新聞の昨年(2009年)の報道ですが、平安時代以来初めて歴史的握手をしたということで、高野山の座主と比叡山の座主が握手をされたことが大きく報道されました。私は科学技術者としてラブロック博士と同じ考えを持ち、今やこういう握手をしているときではないだろう。握手をするのもいいけれども、直ちに両座主は新幹線に飛び乗って東京へ来て、首相官邸を訪れて「いったいおまえたちは何をやっているのだ、この地球の危機に」と大喝を加えるべきであると思ったのです。

ですから私は、宗教界はまさに個々人の、人生いかに生きるべきかばかりではなく、我々が生きている、あるいは3000万のはかの生物種が生きているこの地球生命圏をいかに存続させるか、それにも全力を尽くすべき時代が到来したと考えるわけです。

環境白書には、今日1日の地球でどういうことが行われているかが紹介されています。まさに1日の地球です。1日で何と22万人、人口が増え、800万トンの食料が生産され、自動車は20万台製造され12万台を廃棄し、800万バレルの石油を使用している。したがって、二酸化炭素は8000万トン、今日1日で排出されるわけです。

二酸化炭素の平均寿命は300年、その放出量の25%は数千年から数万年、空気中に残留すると考えられていて、まさに石油文明は、数世紀あるいは数千年先の我々の子孫およびほかの生物にも影響を与えてしまうことが、科学的に明らかになっています。温暖化は進行しており、世界の識者は「これは新たな世界大戦である。我々は惑星的な非常事態にいる。文明を救うために総動員せよ」等と言っています。

2004年の段階で、二酸化炭素に換算した温室効果ガス排出量の総量は490億トンに達しているわけです。この490億トン削減しなければいけないわけですが、京都議定書では、先進国は年間約10億トン削減しようということを決めた。490億トンを出しているのにわずか10億トン削減しようというわけですが、アメリカは既に離脱しています。日本とヨーロッパが努力しているにすぎない。全く焼け石に水である。そこで、温暖化の加速が起きており、世界の平均気温は既に0.8℃上昇しているわけです。

これをご覧になってください。太陽から来るエネルギーと地球から宇宙へ放出するエネルギーはバランスしていたわけですが、温室効果ガスが赤外線を吸収するために、そのバランスが崩れているわけです。その結果、1m²当たり0.85Wの豆電球がつけばなしの状態になっているのが現在の温暖化です。ですから、ものすごい数の、いわば0.85Wの豆電球がつけばなしの状態になっている。したがって、いま地球の表面に莫大な熱エネルギーが蓄積されているわけです。

このエネルギーは10の24乗J（ジュール）で、人類が1年間に使う総エネルギーの約400倍の熱エネルギーが地球の表面に既にたまっていきます。その8割は海に蓄えられている。これが原因で、サイクロンとか、2003年の3万5000人が亡くなったヨーロッパの熱波とか、さまざまな極端な異常気象が起き始めているのです。この世界的な異常気象の連鎖は単なる自然変動ではなく、地球温暖化の影響であることを我々はいま感じ取っているわけです。

まず、ロシアの熱波ですが、過去1000年間にロシアではこのような熱波は観測されなかった。左側は2003年のヨーロッパの熱波、右側は今年7月のロシアの熱波で、モスクワでは気温が平均気温より8℃上昇したわけです。「1000年に一度の熱波」という意味は、毎日の平均気温の分布をとると、そのような異常高温が1年間に起こる確率を計算でき、平年より8℃も高くなるような熱波が1年間に起こる確率は1000分の1。言い換えれば「1000年に一度の熱波」と言うわけです。

一方、アメリカのテネシー州でも「1000年に一度の洪水」が今年5月1日から2日、何の警告もなしに起きたわけです。36時間で305から508mmの雨が降り、テネシー州の95の郡のうち52が豪雨に見舞われました。パキスタンでも、2000kmにわたってインダス川が氾濫し、国土の20%が水に浸かり、2000万人が被災し、400万人が家を失い、2000人以上が亡くなられたと報道されています。これは8月9日の写真です。

さらに我々を驚愕させたのは、グリーンランド氷床の先端部分が崩壊したことです。左側は7月28日のペーターマン氷河、右側は8月5日のペーターマン氷河で、右側のものには明らかに先端部分にくっきりと亀裂が入っているわけです。結局、面積260km²（アメリカのマンハッタン島の4倍の大きさ）、高さ220mという巨大な氷山が出現したわけで、これはグリーンランド氷床の崩壊が間近に迫っているという疑いを抱かせます。

この気候変化の悪影響は戦争の原因になり得るという認識が、この数年、急速に世界に広まっています。ドイツのハラルド・ヴェルツァーは『KLIMAKRIEGE』という本の中で「啓蒙の時代の終焉」ということを言っている。気候と資源をめぐる戦争が21世紀に当たり前になり、この300年間、西洋文化の根幹として中心的な価値をなすヒューマニズム、良識、法秩序が揺るがされるというのです。

一方、軍事専門家のウィニー・ダイアーは、やはり『Climate Wars』という本を書いて「気候戦争が迫っている」と警告しています。洪水や干ばつによって食料が入手できない大量の人々が国境を越えて移動する事態になれば、もう武力紛争、戦争になる。彼が予想しているのは、2035年にはインドとパキスタンの間で水戦争が起きる、あるいは2040年代には環境崩壊で中国で内戦が始まるというようなことを予想しているわけです。

イギリス、ドイツ、アメリカ、日本の軍部は、気候戦争が起きたときにどのようにするか、その報告書をまとめて公表が始まっています。最初の気候戦争は、スーダンのダルフールで起きたダルフール紛争だと言われています。降水量が4割減り、牧畜民と農民の奪い合いになり、これが民族対立という火種に油を注ぎ、その結果、100万人が虐殺されたと報道されています。

そういう状況で2009年5月にはロンドンに、チャールズ皇太子の呼びかけによってノーベル賞受賞者等が集まり、「気候変化は人類にとって核戦争と同様の脅威である。気候変化に関する有効で国際的な合意に達すること」というようなアピールを表明しているわけです。

皆さんの中には地球温暖化について懐疑的な方もいらっしゃると思いますが、地球が温暖化していることは科学的に十分に証明されています。しかも、過去50年間の地球温暖化の原因は、まず疑いなく人間活動が原因の温室

効果ガスの大量放出である。これはほぼ確立された科学者の意見です。

この点に関しては、昨年、クライメート・ゲート事件という名前で、「IPCC の報告書に何点か誤りがある」。それで、IPCC の報告書の内容の検証活動が世界各国で行われました。その結果はどうか。今年の3月にアメリカ科学アカデミーは3冊の報告書を出し、9月30日にはイギリス王立協会が報告書を出しています。10月にはフランス科学アカデミーがやはり報告書を出しており、いずれも、IPCC の現在の地球温暖化はまさに我々が大量放出している温室効果ガスが原因である、これは揺るぎのない結論であると述べています。

その理由は、現在、地面に近い対流圏は温暖化していますが、成層圏は寒冷化しています。太陽黒点、あるいは宇宙線説ではそれが説明できない。温室効果ガスが毛布のようにまとわりついて放射平衡が変わるために、対流圏の温暖化と成層圏の寒冷化が同時進行していることが説明できる。IPCC の第四次報告書では、「過去 50 年間の地球温暖化の原因は、温室効果ガスが大きな役割を果たしている。」としているわけです。ここに挙げた五つの理由は、その根本的な温室効果ガス、特に長寿命である CO² が真犯人であるという根拠です。

国際社会では、科学者集団は続々と温暖化の進行を認め、憂慮する声明を出しています。各国科学アカデミーが連名して声明を出していますが、そのほかにも 86 名のアメリカのキリスト教指導者がブッシュ大統領に対し、「直ちに対策を取れ」という声明を送ったりしています。特に 2004 年、アメリカのブッシュ政権のときには科学的知見を踏みにじた政策決定が行われたわけで、それに対し 1 万 5000 名を超えるアメリカの指導的な科学者・医学者がブッシュ大統領に対し、「政策形成における科学的誠実さの回復を要求する声明」を出しています。

皆さんご存じのように、既に温暖化の影響は顕著に現れ始めています。洪水とか、ブナ林が枯れるとか、米の収量が落ちる等です。今年は日本では 300 名が熱中症で亡くなり、5 万 4000 人が救急車で搬送されている。集中豪雨、特にこの前の奄美大島における時間雨量 120mm の豪雨、これも全く予測ができなかった。

そこで、我々はこの問題に積極的に対応せざるを得ない。まさに省エネ、あるいはエネルギーの転換により低炭素革命を実行する。2 番目は、既に起き始めている海面水位の上昇、豪雨による農業の不振等に積極的に対応する、適応する。これはやらなければいけないわけです。

では、国際社会はこれにどう立ち向かおうとしているか。1996 年にヨーロッパは、気温の上昇を 2℃以下に抑制する「2℃ターゲット」を打ち出しました。私はゴア前アメリカ副大統領とも会談し、ゴアさんも「2℃以下に抑えることは十分に可能だ。しかし、そのためには革新的努力が必要だ」と仰っていました。

なぜ 2℃以下かという、2℃を突破すれば何十億という人々が水不足、マラリア、飢餓、沿岸洪水にさらされる。気温上昇が 1.5℃を突破すると、約 100 万種類の生物種は絶滅する可能性が高い。これはウィルソンのつくった写真ですが、既に 20 世紀に絶滅した動物・植物です。

現状はどうかというと、化石燃料起源の CO² は IPCC の最悪のシナリオで増加しています。地球の表面温度は自然の揺らぎでジグザグしますが、地球の温暖化は揺らぎながら、30 年から 50 年の時間間隔で見れば確実に増加しています。今年 2010 年は過去 120 年間で最も暑い年になるだろうと予想されている。

海面水位は上昇しています。海面水位については、当初、2007 年の段階では、21 世紀の末に最大 58cm ぐらいと考えられましたが、非常に保守的な予測であり、現在では平均海面水位は 1m から 2m 上がってくると考えられています。ところが、アメリカの NASA のゴダード研究所長のジェームズ・ハンセン博士は、最悪 5m から 6m 上昇することも考えに入れなければいけないと言っています。

それでは、2℃を突破するのはいつかが大変問題になるわけです。CO² を今どんどん放出しているわけですが、2009 年からずっと年間累積でどのぐらい放出すると、2℃を突破する確率が 50%を超えるか。1 兆 2000 億トンと計算されている。これを使って単純に計算すると、2032 年 5 月 12 日には 2℃突破の確率が 50%を超える。すなわち帰還不能地点、もう引き返すことができなくなる地点を超えてしまう。これを「ポイント・オブ・ノーリターン」と言っており、分かりやすく言えば、温暖化地獄の入り口に到達するということです。

そのために、この 2℃ターゲットをどのように守るか。温室効果ガスの大幅削減が必要だと科学者は考えているのです。多くの研究成果を勘案すると、今後 5 年から 10 年ぐらいで世界の排出量を最大にし、その後、清水の舞台から飛び降りるように減らし、2050 年までに 90 年比で 5 割削減、21 世紀の末には 8 割削減、22 世紀の前半にはほぼゼロにする。したがって、我々の 100 年、200 年、1000 年後の将来の子孫およびほかの動物・植物を考えるのであれば、次の 100 年でゼロカーボンエコノミー、化石燃料に頼らない文明を我々をつくるしかない。

これが科学者の考えなのです。

ドイツは面白い計算を出しています。2℃ターゲットを67%の確率で守るために、今後どのくらい我々はCO²を排出できるか。答えは7500億トンです。これは、世界人口68億人として1人当たり換算すると110トン。皆さんも私も1人当たり110トンしか出せない。日本人はいま年間10トン出していますから、簡単に言うと11年で使い切ってしまう。ということは、日本は12年後からはゼロカーボンエコノミーをやるしかないという話になるわけです。問題なのはこういう厳しい話がマスコミで全く報道されていないということです。

イギリスの有名なハドレー・センター（気候のシミュレーションで有名な研究センター）は、昨年、最悪の場合にはあと50年で4℃突破する可能性がある。4℃上昇すると、オーストラリア、アメリカの一部、アフリカなど多くの国で農業が崩壊すると考えられています。ということは、文明の崩壊である。ということで、あと50年で文明の崩壊というところに人類はいま差し掛かっている。ロンドンのサイエンス・ミュージアムでは、2060年に4℃を突破したときにはハリウッド映画「Day After Tomorrow」の世界になるから、4℃上昇の世界地図「Day After Tomorrow Map」を今、ロンドンの科学博物館に来る人たちに配っていると報道されている。

そこで現実に国際移住機関は、環境変化によって移住せざるを得なくなる人々（環境難民）の数を推定していますが、2050年までに最大7億人、最小2億人。こういう人が2億人から7億人発生してくる。飢餓人口は既に10億を突破している。そういう中で、グリーンランド氷床の大量融解で年間1700億トンの氷が失われている。アマゾン、あと20年で6割が伐採され、枯れてしまう危険が迫っている。海は大量のCO²を吸収しているために酸性化が進行し、あと数十年で炭酸カルシウムを骨格とする生物は絶滅の危機に瀕すると心配されています。

その中で、北極に浮かぶ氷の面積が激減しているのです。2007年は面積が最小、2008年は体積が最小になり、昨年7月7日には、2015年の夏には北極海水は消滅する可能性が出てきたという研究が公表されました。今年3月には、北極海水の消滅は2016年±3年。すなわち、早くてもあと3年後には、夏の北極海水は消滅する可能性が出てきたという大変なニュースが公表されました。早くも3年後、遅くともあと20～30年には、夏の数カ月、北極海に氷がない状況になる可能性が高いということです。

すなわち、太陽光線はどんどん注ぎますから、太陽光線の9割は北極海に吸収されるために温暖化が加速する。その結果、シベリアやアラスカのツンドラが急激に解け、メタンガスが出てくる。メタンは強力な温室効果ガスです。まさに悪魔の温暖化のフィードバックサイクルが始まるわけです。キリマンジャロの雪はあと12年で消滅と、ロニー・トンプソンという有名な氷河学者が推測しています。ボリビアのチャカルタヤ氷河は、予想より6年早く消滅しました。

ということで、絶体絶命のところまで人類はいま来つつある。私は今64歳ですが、私の子どもや孫の時代は確実に地獄の1丁目、2丁目、3丁目を経験していくことになると考えていいわけです。皆さんはそれをどう考えるか。しかも、世界は気候ターゲット2℃を合意しましたが、2℃でも安全ではないと考えられている。

我々は低炭素革命、あるいは循環型社会づくりをやりながら、既に現れ始めている温暖化等に対する対策を打っていかなければいけない。そのために、いろいろなシナリオが提案されています。省エネ、バイオ燃料、原子力、再生可能エネルギー、炭酸ガスの捕集貯留装置の建設等です。経済的に見ても経済学技術的に見ても、十分にやれる。年間100兆円くらいのお金を今後40年間にわたって投入していく。すなわち、4000兆円のお金を投入すれば、十分この問題の解決はできるというのが経済学者の観点で、それで世界は低炭素経済へ向け急激に動き出したわけです。

安倍元総理は、温室効果ガスを世界で半減するというのを提案されました。福田元総理は、2050年までに6割から8割を日本は削減すると決定しました。昨年7月のイタリアのラクイラ・サミットで麻生元総理は、2℃ターゲットを、先進国は2050年までに、8割以上削減を受け入れて帰国されたわけです。さらに1年前に鳩山前総理は、日本は2050年に8割削減、そのために2020年までに25%削減ということをも明言されました。

この4人の元総理は、明らかに科学的な知見を踏まえた政策決定、決断をされたわけですが、日本の社会はこれに見合うような低炭素革命をやっているかということ、やっていない。それが非常に大きな問題なわけです。

昨年12月のコペンハーゲンでは、2℃ターゲットについては、途上国への大量な資金援助を除いて全く惨憺たる結末に終わった。これは言うまでもなく中国、アメリカという削減義務を負わない（二つの国を合わせて41%を放出している）、いわば悪の枢軸がこの国際的な合意をぶち壊した原因です。

私が非常に憂えているのは、今度のアメリカの中間選挙でオバマさんは大敗しました。だから、アメリカが温暖化と戦う政治的な基盤がまた揺らいだのです。一方、中国はどうか。中国は国内的には温暖化対策を進めています。国際的にはまだ途上国だと言い張って、温室効果ガスの絶対量の削減に踏み切っていない。

このままいくと、中国の放出量は巨大なものになるわけです。現在でも年間約60億トン放出しているわけですが、2020年までには90億トンぐらい一つの国で放出することになる。まさに中国とアメリカがほかの国、ほかの動物・植物を巻き添えにしながら、集団自殺の道を歩んでいるのです。このことを宗教関係者は何と考えるか。宗教関係者はこのことを肝に銘じていただきたい。

そこで、どういう対策をとるか。まさに地球温暖化対策基本法を制定する必要がある。ところが、現在の民主党政権は、これをいっぺん衆議院で可決しながら、それを廃案にし、参議院選挙に打って出て、選挙で負けたわけです。いま現在の国会に温暖化対策基本法案を上程していますが、通るかどうかはまだ分からない。これも我々は政府の尻をたたいて、あるいは各政党の尻をたたいて、一刻も早く地球温暖化対策基本法案を可決、成立させなければいけない。

さて、それでは科学技術のほうではどうかというと、基本的に十分対応できるような技術は既にある。もちろん今後とも技術革新を進めなければいけないわけですが、皆さんに写真だけをお見せします。エコマテリアル、エコプロダクツ、エコサービス、さまざまな材料、製品、サービス、技術、建物等いろいろなものが開発されているわけですが、残念ながらこういうものがコストの壁、あるいは社会的な法制度の壁に阻まれて十分な普及ができていない。ここに問題解決のカギがあるわけで、我々は社会の制度を変える必要がある、仕組みを変える必要がある。まさに税金とか補助金とか、さまざまな制度を変えない限り、ここに挙げたような環境配慮の製品技術は普及できないのです。

私は1999年以来、日本のエコプロダクツ展示会の実行委員長を仰せ付かっています。これは過去11年、急激に発展してきました。2000年には当時の森総理、川口環境大臣を案内していますし、2008年には福田元総理を案内しました。昨年は、東京ビッグサイト東展示場6ホールにあふれんばかりの出展、3日間で18万2000人が来場される程に発展しました。

そういう意味からしても我々日本は環境製品、環境技術、環境に先進的な企業や、お金もあるし、技術もあるし、人材もあるという恵まれた状況にありながら、残念ながら国民の覚悟が決まらない。特に政治家は生死存亡をかけた戦いが行われているという意識が全くない。国民も覚悟がなければ政治家にも覚悟がないために、せっかくこれだけの技術、製品、人材がありながら、それを世界に発信、あるいは普及させることに結びついていけないわけです。

国際展示会もやっており、こういう製品のディレクトリーも発行しています。これは今年3月のジャカルタのエコ国際展で、私からインドネシアの大臣にディレクトリーを贈呈しているわけですが、来年3月にはインドで行う予定です。

そういうことで、経済的に言うと、現在の世界のいろいろな問題を解決するには、「Ecologically Sustainable Economic Growth」、つまり「環境的に持続可能な経済成長」というキーワードしかないわけです。それで、私が大変うらやましいのは、まさに韓国やマレーシアは国家の総力を挙げてそういう方向へ動き出していることです。

今年の1月13日に李明博大統領は低炭素グリーン成長法を成立させ、署名し、10月にはグローバルグリーン成長研究所をソウルに設立しました。続々とそういうグリーンな経済革命、産業革命をやらなければだめだという認識は広まっているわけですが、我々の精神、我々のマインドセット、我々の心がそういう方向に向かっていないのです。20世紀型の心を持って、このグリーン革命をやろうとしていますから、うまくいかない。精神革命を伴わなければ、こういう科学技術産業革命ができないということでもあるわけです。

マレーシアはどうか。先々週、私もマレーシアに行きましたが、ナジブ首相が30分間演説され、まさにマレーシアはグリーンな経済成長の地域のハブになることを表明されました。右側はナジブ首相で、左側の方は昨年設立されたエネルギー・グリーンテクノロジー・水問題省の初代大臣です。EUも巨大なブースを出し、EU大使も来られていました。マレーシアの国王も見学されていました。私も基調講演で、「地球温暖化と闘え」と言って参りました。

今までの話はいい方向の話をしたのですが、科学者の中では間に合わないのではないかという焦燥感がこの数年出てきました。そこで、気候の非常事態、まさに北極海氷が夏の数カ月解けてしまったらどうするか、その事態をどう乗り切るかという議論がなされています。

パウル・クルッツェン（ノーベル化学賞受賞者）は、成層圏に150万トンの亜硫酸ガスを注入せよ、それで太陽光線を反射して地球を急激に冷却化させようということを提案しました。実はこの考えは、アメリカの「水爆の父」エドワード・テラーが長年提唱してきた考えです。今まではマイナーな考えだったのですが、この数年、政治家あるいは国民が全く能天気、無知蒙昧でいるものですから、いま科学者のほうは、もう待てない、非常事態に備えなければならないという意見が増加しています。

太陽光遮蔽板を宇宙に打ち上げる。あるいは道路や屋根、砂漠に反射鏡を取り付けて太陽光線を反射する。あるいはヨットで海水をくみ上げて空気中に噴霧し、大量の雲をつくり出して太陽光線を反射させる。特にいま力を入れて研究されているのは、成層圏に亜硫酸ガスを注入する方法と、ヨットで大量の雲をつくり出す方法です。

硫酸エアロゾルの注入を行うと、何が問題になるかということ、太陽光線が成層圏で反射されてしまうために、青空が見えなくなる。さらに星空も見えなくなる。さらに夕焼け空が血の色のようになると言われているわけです。アメリカとイギリスの下院の科学技術委員会は合同の調査委員会をつくり、この1年間検討し、先月、報告書を出しました。その報告書で、こういう技術を最後の手段として直ちに研究を始めなければいけないということを述べています。

ちょうど1年前に、イギリス王立協会は「Geoengineering the climate」というレポートを出し、こういう地球の気候を変える、タブー視されていた技術を、日の目を見させなければいけないとしました。アメリカのエネルギー庁長官のステーブ・チュースは、屋根や道路を白いペンキで塗って太陽光線を反射させるのは大変いいことだと言っています。ビル・ゲイツは450万ドルのお金を出し、自分自身もGeoengineeringの五つの特許を申請中で、3月にはカリフォルニアでGeoengineeringの野外実験のガイドラインをつくる初めての国際会議が開催されました。

ところが、それに対し環境NGOは絶対反対と、こういう危ない実験の中止を求めて動いており、幸い、今回の名古屋のCOP10（生物多様性条約の会議）では、当面、Geoengineeringのような危ない実験は停止するということが決まったそうです。このGeoengineeringは、非常に多くの問題を持っています。倫理的問題、誰がそういう権利を持つか、1国あるいは個人でも実行できる、そのガバナンスの問題です。誰がそれを規制するか。これがいま非常に大きな問題に挙がっているのです。

私が今まで申し上げたのは、人類がいま直面している問題を申し上げたわけで、アメリカ、中国がまさに世界の温室効果ガスの41%を排出して、何ら削減の義務を負っていない。こういう中で12月のメキシコのCOP16、これも空中分解がはじめから分かっているわけです。そういう中で科学者は焦燥感に駆られて、一部の科学者はGeoengineering、気候を改変する方向へ動きつつある。イギリス政府、アメリカ政府はその研究支援に乗り出している。

これを考えると、私たちはどうすべきか。これは非常に大きな国内運動、国際運動を展開し、まっとうな、まさに低炭素革命を実行するところにおいて我々は解決策を見つけていかなければいけない。第一に優先すべきことは、社会制度を変え、環境技術を普及させ、低炭素革命を実行し、循環型社会をつくり、そういう方向で問題を解決していく。第2番目の方法は、既に現れているさまざまな温暖化影響の対策を打っていく。最後の手段として、気候工学（Geoengineering）について調査研究、国際的な規制について検討していくことになると思います。

サステナビリティ。人類を工業文明から環境文明に替え、豊かな地球生命圏を1000年、2000年と持続させるために、さまざまな概念、手法、国際標準が開発、提起され、使用されてきたわけです。詳しくは申し上げませんが、1970年以前、70年代、80年代、90年代、2000年代というように、続々と新しい環境概念、環境理念、環境手法が開発されてきました。

私は宗教関係の研究者の先生方とお話をするうちに、大変大きく理解が深まったのは、20年間、こういう概念や手法を独自に研究し、開発してきたつもりでしたが、実はよくよく考えてみると、こういう環境理念、環境概念、環境標準は実は宗教理念と密接な関係にある、宗教理念に裏打ちされているということを思い知らされました。

これはまさにドラフトであり、多くの先生から批判もされているわけですが、自己認識、自然認識、価値観、我々の社会をどう持続可能なものにしていくかという手法について、環境コンセプトと宗教理念の対比を試みたわけです。全く不十分であることは言うまでもないわけで、私はまず環境と宗教、それから哲学も入ると思いますが、我々は環境は環境、宗教は宗教で別にやっているわけではなく、1人の人間としては両方を当然備えているわけです。

そういうことで、宗教界に期待されるものとしては、第1番目に、我々がこの数十年にわたって開発・発展させてきた環境理念、環境概念・手法という環境コンセプトの内容を豊かにし、強化するために、宗教関係者・宗教学者はもっとその方向の研究を行っていただきたい。さらには、新たな環境コンセプトを創り出してほしい。既に提起されている、使用されている環境コンセプトを積極的に活用してほしい。例えば、環境マネジメント、環境経営管理を実践する。グリーンな製品、技術を積極的に購入する「グリーン購入」を実行する。再生可能エネルギーを使用する。食料の地産地消を進める。エコファンドのような環境に配慮された企業に投資する、あるいは教義に基づいたファンドを創る。生物多様性保護活動、環境難民の保護。こういう具体的な取り組みが宗教界にも求められると思うのです。

最後に、やはり政府に強く働きかけることが私は必要だと思います。日本は温暖化対策基本法さえまだ成立していない、非常に恥ずかしい状況にあり、さらに炭素税の導入さえできない。環境税の導入ができないわけです。国内の排出量取引は一刻も早くやるべきである。既に進行している地球温暖化への対策を強力に進めさせる。それから、急激な気候変化を阻止するための対策を我々も社会全体で準備する必要があると思います。

組織委員会のご期待に沿えたかどうか分かりませんが、一応、科学技術の観点から現状を要約し、「宗教界に期待されるもの」ということで、後のパネル討論の前座を務めさせていただきました。どうも長時間にわたりご清聴ありがとうございました。

日本人の伝統的環境観 —神・人・自然のつながり—

藺田 稔

大変貴重な、それこそ基調講演を仰せ付かり、責任を感じています。ただいま山本先生から、環境問題に対する非常に切迫した危機の事例をご紹介いただきました。私もかつて山本先生には世界宗教者平和会議の開発・環境委員会に来ていただき、このような話を伺っており、宗教者としてだいぶ尻をたたかされているなという印象を持ちました。さらに今日もお話を伺い、果たして先生のご期待に沿うようなお話ができるか、大変じくじたるものがあります。

「日本人の伝統的環境観—神・人・自然のつながり—」という題をいただき、これに沿ってお話ができるかと危ぶんでいます。ただ、私自身、このテーマに対応してこれから申し上げることの簡単な趣旨は、日本人が古来持ち合わせてきた伝統的な生命観との関係で、現在の環境に対するメッセージが見いだせるのではないかとことです。最初に簡単に申しますと、ここで言う「神・人・自然のつながり」というところは、実は神・人・自然が共有する「いのち」のつながりという意味で、宗教的に捉えられるのではないかとということをお話ししたいと思っています。

お手元に最初にお配りした要旨ですが、要旨はむしろ前置きです。時間をあまりとりたくないのですが、最初の数行だけをまず申し上げたいと思います。現代社会がグローバルに直面する環境問題について世界の諸宗教が積極的に関わることの可能な分野に、全人類を含めた地上のあらゆる生物の生態系を保全するための生命倫理を再構築して、いかに現代人すべての心根に訴えることができるかという課題として捉えさせていたいただきたいと思ってきました。

近年、宗教と環境の関係で私なりに考えてきましたが、そこで大事なのは、宗教者側から見ると、我々がリアリティとして持っている「いのち」の捉え方が一つのキーワードになるだろう。その場合のいのちは、決して死のない生命ではなく、生と死あつての命の主体的な人間の生命観、これこそが宗教が本来持ってきた「いのち」の捉え方であり、また自己矛盾をはらんだ問題意識だろうと実は思っている次第です。

いわゆる今の一般的に使われる「生命」という言葉は、どちらかという死を無視した、死のない生命しか問題にしないというところが、実は人間として生命をどう捉えてきたかという脈絡の中では、やはり近代のものでしかない。もっと実存的な意味で生命を捉える場合に、日本語では「いのち」という言葉は非常に便利なので、生命といのち、この二つを別に使い分けながらお話をさせていただきたいと思っています。時間があまりありませんので、お手元に配りましたもう一枚の概要に沿ってお話をさせていただきたいと思っています。

まず最初に、具体的な例として、諸虫供養と草木供養という習俗行事が実はまだ日本でも現に行われていることを紹介したところから入りたいと思っています。まず、諸虫供養、これは虫供養と言うのですが、端的に言うと、田畑を耕すときに邪魔になるといふか、阻害する害虫を供養するという習俗がある。日本人には案外当たり前のことですが、かなり大事なことかと思ひ、実際に現場を確かめてきました。

「福島県奥只見三島町早戸集落の虫供養行事」とそこに書いていますが、これです。奥只見というと西会津にも奥会津にもあたりますが、たくさんダムのできた溪谷の深い山間集落が点在するところです。早戸地区は、たっ

た二十数戸しかない、住民は32人ほど、しかも高齢者が慎ましく住んでいるような集落ですが、そこで現に旧暦10月10日に行われているのは虫送りではなく虫供養なのです。

虫送りは皆さんもよくご存じだろうと思いますが、これは日本の農村ならどこでも、今でも、子どもを中心に行っているような行事です。ところが、諸虫供養、ないし虫供養という行事は実はそれほど多くはないです。私もうっかり気が付かないで、こういう害虫を供養する行事があるのをつい最近教えられ、それで現場を確かめたものです。

時間がないので、ビデオ、映像その他は省略します。持ってきてはいますが、もし必要があれば紹介する可能性もあります。いずれにしても西会津あるいは奥会津には、かつて虫供養という行事が、旧暦ですが、だいたい秋口に各集落で行われていた痕跡があります。現在は早戸地区にしか残っていません。しかし、実は周辺の各集落の中の墓地には諸虫供養塔があり、話を聞くと、具体的な特別な行事はもうないのですが、お盆やお彼岸に家族でお墓参りをするときにはほぼ必ず諸虫供養塔に花を供えたり、あるいは食べ物を供えたりして、そして帰るということを確かめてきました。

こういう行事が西会津だけかという、実はそうではなく、各地にある。改めて探索してみると、例えば愛知県の一部、あるいは大分県の一部にかなり大々的な虫供養行事を、お寺の行事としても一体として現在でも盛んにやっている地域があります。ですから、必ずしも会津だけに限られたものではなく、かつては各地で、決して虫送りというのではなく、虫送りのやりませんが、同時に害虫供養が盛んに行われていた。そのことはほぼ確かめることができたわけです。

考えてみると、自分たちが農業、あるいはその他のなりわいの中で害虫のような形で駆除しなければならない、あるいはそれを殺さなければならないことに対し、実は日本人は現在でもかなりいろいろな供養の習俗があることは皆さんもよくお分かりだろうと思います。

例えば、漁村で言えば当然のように魚類供養がありますが、そのほかにさまざまな動物供養、あるいは筆供養、こうなると有上無情です。針供養、人形供養なども最近また報道されていますが、こういう有情だけではなく無情に対する供養の行事は現在でも行われています。さらに広く、シロアリなどを駆除する企業たちがシロアリ供養塔を持っていて、毎年一定の時に供養の行事をなさる。高野山の墓地の一部には、非常に目立ったシロアリ供養塔があるのをご存じだろうと思います。

それから、薬品を開発する会社は、実験動物をかなり使う。その実験動物を供養しなければならないということ、各会社がそれぞれ独自に実験動物の供養をなさっている。あるいは大学の医学部は、日本の場合ほぼ共通だろうと思いますが、いわゆる解体する人体だけではなく、実験動物たちの供養をするための施設を持っている。そのようにして先端科学技術に関わる研究機関でも、ほぼ等し並みに、自分たちが殺さざるを得ない動物、場合によっては植物も含めて供養していることを考えると、決して単なる一地域に限られた供養の習俗ではないだろうということです。

もう一つ、そこに書きましたが、山形県の米沢市郊外、これは旧置賜郡という土地柄ですが、上杉藩の藩領内で、最近教えられたのは草木塔、ないし草木供養塔という例です。これはだいたい東北地方の山形県の南地方ですが、米沢盆地に主に集中的に存在する供養塔です。現地でも前から、例えば山形大学を中心にその研究が進められており、山形大学の土橋陸夫さんによると、一般に草木塔は「草木供養塔」「草木供養経」と書く場合もある。または、「山川草木悉皆成仏」とも刻む。そういう碑文が刻まれている石塔で行ってみると主に自然石でできた供養塔です。

日本の国内全体では160基ほどの存在がいま確認されていますが、その約9割は山形県内に分布する。そして江戸時代の中期、その最古のものは1780(安永9)年ですが、米沢市郊外の山間地である田沢地区に私も行ってきましたが、そこには集中的にかなりの数の供養塔が建てられて存在します。

これを建てたそもそもの起源や歴史的な変化の検討も進んでいますが、この機会に紹介する場合、そのことは省略させていただきます。注目すべきことは、江戸時代後期までにこうした供養塔が盛んに建てられただけでなく、その後、近代になり明治・大正時代にはこの置賜地区に新しく21基がまた建立されています。昭和・平成時代になるとこの土地にさらに急激に増え、現在47基が米沢および県内地方に、むしろ昭和・平成時代に建立されている。しかも県外では東京都内が一番多く10カ所、この供養塔が新たに建てられています。

ほかには京都の大原三千院にもあるということです。私自身はまだ確認していませんが、奈良その他にもあり、主に県外では昭和以降平成まで20基が新たに増加しているということで、一気に全国的な分布を示しているわけ

です。

この供養塔の性格を考える意味で、二つ紹介しておきます。その一つは、そこに書きました米沢市郊外の田沢地区に最古の例として1780（安永9）年の夏に建立された2基のうちの一つに、口田沢の大明神という土地に現存する草木塔があります。それを確認してきましたが、その正面に刻んであるのは、概要のところにも紹介していますが、「一佛成道観見法界草木国土悉皆成佛」という文言です。

調べてみると、隋の時代の天台大師智顛の「摩訶止観」は天台にとって大事なものより大乘仏教にとって大事な理論ですが、それを解説した、12世紀の天台学僧の道邃の著作『摩訶止観論弘決纂義』の中に見いだすことができるわけです。こうした言葉が刻まれて江戸時代後期から現在に至るまで草木塔があるということの中に、日本人が持っている、単に人間だけの生命ではなく万物にある「いのち」に対する配慮がこうした各地に供養という形で習俗としても残り、また供養塔という形で現存している。この事実は極めて大事なことだろうと私どもは思っているわけです。

もう一つ、山形県酒田市の日枝神社の境内に平成19年6月に建立された塔は「草木食の塔」であり、その供養塔の例を紹介します。地元で漬物屋を扱う老舗の「佐徳」という会社が建立しており、毎年6月18日に供養祭を行っている例です。その塔の裏側に刻まれた御奉納趣意書には「天地自然の恩恵」という題で文章が書いてあり、それを紹介します。

「山・川・海・野の幸に感謝し、生かされて生きてきた道を思い、その精霊を供養、鎮魂いたすことを目的に、ここに感謝祭を執り行わせていただきます」と書いてあるわけです。これを建てた方のお言葉であることも、実は大事なことではないかと思っています。

これを踏まえ、次に1として「インド由来の不殺生戒と仏教由来の万物仏性観」と書かせていただいています。これは皆さんよくご存じのことですが、インドの一つの大きな宗教的モチーフとしては、不殺生戒（A-himsa）ということで、仏教だけではなくジャイナ教、あるいはヒンズー教を含め、インドのいわば宗教的な命題であることはよくご存じだろうと思います。

アメリカの異彩を放った哲学者ノーマン・ブラウンのLOVE'S BODYという本の中に「食物」の章があるのですが、そこでまず、インドの聖典「バガヴァッド・ギーター」を紹介しています。読むのは省略しますが、「およそ家で家事を営む者は日々殺生の罪を五たび重ねざるを得ない」と指摘し、そして「その一つは乳棒と乳鉢を使うことから、二つには石臼により、三つにはかまどにより、四つには水差しにより、五つにはほうきを使うことから。その人がこうした罪業から免れるには、重ねて五たび、それを犠牲供進の所作としなければならない」という文章を紹介しています。

ブラウンはその後の文章で「そも神の受肉とは正餐のこと」、コミュニオンですね、「正餐のこと、葡萄酒とパンを犠牲に仕立てることだ」と提起し、その後に文章として、概要では横文字、英文で紹介していますが、"There is no way to avoid murder, except by ritual murder." という言葉を結論として結んでいるわけです。

訳させていただくと、「人が殺生の罪を免れるには、殺生そのものを供犠の儀礼とするほかはない。」「ritual」という言葉を少し深読みしていますが、そういう言葉として、つまり万物のいのちの中に生かされる。我々にとって殺さざるを得ない所作、食べ物にしたり、あるいは先ほど言ったように害虫として駆除したり、さまざまな生きることの上で殺すことの罪業を捉え、これを免れるための手段としては単に殺害という行為に終わらせては救いが無い。したがって、そのこと自体を犠牲供進の儀礼とするアイデアです。このようなブラウンの指摘があり、私なりに、これは宗教の基本的な理念だと思ってきているわけです。

こういうインドの生類不殺生というモチーフは、もちろん輪廻転生や六道輪廻の世界観と相まって、広く宗教的な求道のテーマであることは皆さんよくご存じのとおりです。仏教も、またジャイナ教のほうも、これからどう解脱していくかという行道のこれが原点であったかと存じます。現在でもインドではヒンズー教寺院の放生儀礼もあります。それから、これはかなり共通に見られますが、いわゆる肉食主義者などがたくさんいらっしゃる。そういう宗教的な発想の底流に流れている生命観こそは、全生類に共有される生命というより「いのち」なればこそ、実存的な課題になるという部分です。

実はインドから東のアジアに広く分布する、こうした意味での霊的生命観は、いわば確かにアニミズム的な発想が基本ですが、ヒンズー文明、仏教文明ばかりか、日本を含め中国大陸や東南アジア、太平洋諸島などの土着の宗

教民族に広範に共有されている、いわば靈性（スピリチュアリティ）ではないかと思うわけです。

そうした意味で、特に日本仏教の中でどう捉えてきたかをそこにも少し書いておきましたが、時間の関係であり詳しくできません。これも皆さんご承知のように、大乘仏教の中で大乘涅槃經を基本に仏性論がずっと伝えられ、中国で盛んになり、さらに日本で徹底するという経緯があります。そもそも大乘涅槃經では、必ずしも山川草木に仏性はないと言っているにもかかわらず、中国仏教や日本仏教ではこれをさらに広げ、山川草木に仏性があるということが説かれるようになり、やがて悉皆成仏という觀念に展開していることもご承知のとおりです。

しかも、平安仏教のそれぞれ二大存在である最澄にしても空海にしても、いわゆる山川草木、あるいは草木国土にも仏性があるという理論がまずこの二人によって提起され、さらにそれを展開したのが天台本覚論であり、また真言宗の学説あるいは経説という形になり、盛んに山川草木も日月星辰もともに心がある。その心たるや、それが仏性だという言い方で、だからこそ成仏をするのだという觀念に広がってきています。

恐らくこれを支える一つの日本的な状況は、言うまでもなく平安時代初期に始まったいわゆる末法觀と相まって、自力で成仏するというより、むしろ他力で成仏するしかないといった考え方にも支えられ、鎌倉仏教の祖師たちも盛んに、有情無情ともに仏性があり、しかも成仏ができる。そのためには真剣に供養しなければならない、あるいは鎮魂しなければならないという論理が鎌倉仏教の中で完成したと、私自身、狭い知見の中でそう思っているわけです。

その関連で一つ、1の最後に書いていますが、日本語の「ほとけ」という言葉は、実は「仏」と訳すべきではないだろうと、乱暴な言い方ですが、私は思っているわけです。「ほとけ」という日本語の起源についてははっきりとした結論が出ていないようですが、奈良の薬師寺に残っている仏足石の碑には「保止氣（ほとけ）」と借り字して表記されています。

東大寺の僧凝然の著した『八宗綱要』によると、本来、中国では仏教徒のことを「浮屠」と書いており、「ふと」という言葉は、確かに中国あるいは朝鮮から流入し、それを日本的に受けたときに「け」という言葉が付いた。「け」は、日本語本来の「き」「け」という生命力の神秘的な力を言う概念なので、これが付いたということは「仏」になる可能性を持ったあり方だということです。そこに書きましたが、成仏の可能態として仏教的に靈性を捉えた、いのちを捉えた場合の言葉ではないかと思っています。

それぞれに仏性がある、万物に仏性があるということは、それ自体は仏ではありませんので、これこそが「ほとけ」である。だからそれが供養されることによって仏になるという、それぞれ万物が持つ生命的な靈性、いのちのことを仏教的に称したものではないかと思っています。

例えば角川の大きな古語辞典の中でも、「仏教では死者はほとけに歸す」という文章でほとけの漢字を「仏性」と書いており、これも一つの捉え方として私はありがたいと思っています。そういう意味で、こうした日本化した仏教文化の中では、「悉有仏性（しつうぶっしょう）」という場合の「仏性」が日本語的には「ほとけ」にあたるのではないかと考えているところですが、またこれはお教えいただきたいと思います。

さて、日本神話の中ではどうであるかを私なりに申し上げる必要があると思いますが、読んでみると時間がないので、簡単に申し上げます。日本神話とはもちろん古事記、日本書紀を代表とする古典神話のことを指して言っているわけですが、この中では、簡単に言うと、世界の誕生がすべて生命として誕生する。その後に「なる」、あるいは「うむ」という言葉が書いてありますが、要するにこの自然界に命が発生する、その発生の仕方をこの万物が生まれてくる一つの神話的表現にしている。

天地（あめつち）という生命の容器の中に、神も含めてすべてが「なる」、あるいは「むす」という言葉で出現してくる。つまり、生命が誕生する形で神も人も語られる、あるいは万物も国土もすべて生まれるわけですが、そういう誕生神話です。

これは創造神話とは全く違うわけです。つまり創造神話は、聖書神話がまさにその典型ですが、地上のすべてを超越する存在である神が意思して、この世界を創った。日本神話の天地開闢は、創る、創られたという関係での神々のあり方、人のあり方、世界のあり方ではなく、自ら生まれてくるという形で生命として誕生してくるということです。これが中国の盤古説話のように、卵生神話もその中ですが、要するに、形のないカオスから形あるものが生まれてくるという形での神話の語り口です。これはかなり決定的に生命觀の違いとして出てきます。そのことを実は説明するつもりでしたが、時間もありませんので、その程度にさせていただきたいと思います。

さて、3番目に「神仏という日本の宗教文化」と書きました。これはあえてここで申し上げるまでもないことですが、日本では当たり前のように「神仏」というように、神々に対し、あるいはほとけに対してということでもありますが、これを一体として取り上げる、表現する。これは皆さんもご承知のように、海外の宗教文化ではあり得ない捉え方です。全く異質の崇拜対象を一つにして「神仏」と言って、ずっと言い表しているということです。これは比較宗教的にも、日本の宗教文化を考える場合にも、大事なことだろうと私は思っているわけです。

私はそもそも宗教のあり方に二つタイプがあると思っています。文化としてある宗教のあり方、それに対し、いわゆる教祖が教理を立て、そしてその信仰の下に教団をつくるという意味での教団宗教のあり方は違うのではないかと考えているわけです。ここで問題にしているのは、まさに日本の宗教文化を別称すれば「神仏」という形です。ずっと使ってきているという意味が大事だろう。いわば、いま日本の宗教のあり方の中にはそういう宗教文化という基礎があり、これによって日本人全体が一つの生命観を持っているわけですが、その上にさまざまな教団宗教が載っているという二重構造と捉えることも可能だろうと思います。

それにしても、そういう宗教文化という面で神仏の世界に注目すると、2番目に書いたように、日本のそれぞれ各地にある風土、山川風土と一体の、神も仏も一体のコスモロジーを持っている。一つの風土単位は、例えば盆地一つ、あるいは大きな山がちの地域が独特の気候単位であると同時に生活の単位でもあるし、また同時に神仏という宗教単位でもある。これは私もずっと調査・研究を重ねてきた部分ですが、一口で言えば、「宗教風土」という言葉で表現できるものだと思います。

その中に、そこに書いたように、盆地の風土。例えば、奈良の大和盆地などがその典型ですが、日本は100余りの盆地からなると言われるように、水系単位にたくさんの盆地があり、日本列島ができていくということは、かつて論じられたことがあります。しかし、その中でも盆地がちの風土の単位だと、これは割合に「美(うま)し国」とか「まほろば」というふうな現世的な一つの世界として捉えられている。ところが、山がちな山地風土は、凸型の風土単位ですが、どちらかというと霊地とか霊場といった他界的な傾向を持った宗教風土として捉えられている。

例えば大和に対する熊野地方は、現世的と他界的という考え方で言うと熊野の霊地としてのあり方を考えることが可能だろうし、また大和に対する出雲も、現世的に対して来世的という面で捉えることができる。そもそも「熊野」という言葉は「隠れたところ」という霊地を指す古来的な言葉でもあり、「神」という言葉の原型にもつながる言葉でもあるわけです。

そういう中で一つひとつの風土が、一方は神の世界であり、他面では仏の霊場であるという形で、一つのまとまりのある宗教的世界を構成していることは実証的にも捉えられると私は思っています。そもそも日本語の「神」は「くま」「くむ」「かくれる」「こもる」といった古語から次第に語形変化し、最終的には「かみ」になった。これは国語学の最近の成果ですが、現象学的に見ても日本の神は、「秘すれば花」という世阿弥の言葉のように「尊いものは隠れてある」という中で、神は姿を見せないという性格を強く持っています。今の神社のあり方、杜にこもるあり方、あるいは御社殿にこもって御神体そのものは全く見えないという中で、日本人はありがたく思ってくださっているというようなあり方でもある。

それに対し「ほとけ」のほうは、先ほど言いましたように、ほとけになる可能性としての、場合によっては死者そのものも広く表すような言葉でもあり、いわば祖先、祖霊でもある。そして、それは供養すること、あるいは鎮魂することによって神になり、本物のほとけというか成仏するという意味での仏になるという可能性を持った生命の捉え方と考えることができます。

この場合の神とほとけは、ともに「霊的な生命」と書きましたが、要するに私の言う「いのち」を構成する一つの世界観であると捉えることができる。そうであればこそ、いわゆる神仏習合なり神仏共存という問題は、生命観から一つ捉え直すことができるだろうと私は思っているわけです。これはまたご論議があれば大変ありがたいと思います。

その後のところは抜いて、いのちの連帯性、つながり、縁、結びというところに移りますが、時間も迫っているので、そこに書いてあることだけを申し上げて済ませたいと思います。

私が考えている「生命」という言葉と「いのち」という言葉を使い分けます。生命と言う場合には、そこに書いたように、いわば第三者的に生命を客体化した、これは今の科学は全くそのとおりだろうと思いますが、日本語的に言うと「生きるもの」として捉える。そうすると、その生命体は個体としてしか捉えられない、あるいは第三者

的な生命体という捉え方であり得るかと思えます。私はこれを "Life without Death" という言葉で表現したことがあります。死というものを排除して、生のところだけを生命として捉える、見えるところだけを捉えるという意味での捉え方です。

それに対し、もっと我々のリアリティの問題として、心がある中で生命を主体的に捉えると、これは「いのち」という言葉で表現できるだろうと思えます。生まれること、生きること、生きるとは死ぬことであり、同時に生きるには殺さなければならないという矛盾を含んだ、我々の主体的な「いのち」の捉え方です。これこそが宗教的なモチーフとして、客体化された第三者のただの生命という意味ではなく、我々自身の問題として「われのいのち」あるいは「我々のいのち」として一番宗教がテーマにしてきた。つまり、生きることがそのまま死ぬことであり、殺すことであるという自己矛盾がどう救われるかという形で一つの宗教のテーマとして、基本的な実存的なテーマとして伝えてきた。

そういう中であらゆる宗教の原点は、むしろそういう主体的な生命の捉え方である、日本語で言うと「いのち」という言葉になるだろうと私は思います。その場合のいのちは死を含んでいるわけです。"Life with Death" つまり生と死あつてのいのちという捉え方である。今の客体的な捉え方だと、生だけがいのちだと捉える。だから死は排除されて考えるということだろうと思えます。

そういう中で、我々はこうした環境問題に生命観としてアプローチするという共通項をもし提案できるとすればどうということかということで、最後の結びに、スピリチュアルな生命観の復権こそ宗教者の役割と書きました。

要するに、生命をめぐるのは、客観的な fact (事実) として一方では科学的知見に人間を含めた全生物の生命連鎖というエコロジー的生命のつながりを冷静に自覚しつつ、他方では主体的な reality (現実) としての「いのち」の自己矛盾を止揚する宗教的な賭け (leap) として、神仏も人も自然万物も共にする霊的連帯という伝統的エトス (ethos = 倫理的気風) を再構築して、現代人の心情に強く訴えることが、宗教者ならではの役割ではないかと思えます。

エコを進める菩薩行とは何か

原井 慈鳳

菩薩の役割

私ども法華宗は日蓮聖人門下の一宗派です。開宗、宗を開いてから750余年、私どもは「菩薩行の実践」を宗派のテーマとして推進してきました。しかし、それが近年、掛け声ばかりになっているのではないかという反省から、私どもは社会の抱える難問にもっと対応できるものを持っていないのではないかと。社会に門戸を開こうということで、菩薩行研究所を立ち上げたのです。そのときには、布教部門があるのではないかと、教化センターがあるのではないかと宗内で大変な議論をいただきました。しかし今がこれを立ち上げる大事なときであるということ合意し、認識して近年立ち上げたものです。

たまたまその間、平成19年に、今日の山本良一先生、それから浄土宗の総合研究所の戸松義晴先生と私で、仏教タイムスが企画されました「病める地球と仏教」という鼎談があり、3回のシリーズで連載されました。本来、科学と仏教は相容れないものである。世論でも科学の扱うものと仏教の扱うものは別々であると言われてきましたが、私は、今の危機の時代こそ科学と仏教が接点を持たなければならないし、自然環境悪化に対応すべき警鐘を共に鳴らさなければならないと思うのであります。

宗教学者の山折哲雄先生が「迷いの大乗仏教」ということを盛んにおっしゃっていますが、私は、迷いの大乗仏教ではなく、迷っているのは仏教の捉え方ではないかと思っています。法華経の中に出てくる菩薩行は、五百弟子受記品第八に明記されていますが、菩薩の誓願は仏国土をつくることです。お役目が仏土の浄化そのものなのです。ですから仏法を発揚し教化するのですが、仏国とは、天国（ヘブン）ではなく、西方浄土ではなく、この地球を仏国土にするお役目が菩薩です。

廃仏毀釈の禍恨

近代、仏教が大変弾圧を受けた歴史があります。慶応4年から明治8年にかけての神仏分離令以来でした。このときはたくさんの寺院がつぶされ、たくさんの僧侶が追われ、たくさんの文物が海外に流出しました。メトロポリタン美術館、ボストン美術館になぜあれほど日本の国宝クラスのものが行っているのか。つい最近も、日本人が13億の仏像を海外から買い戻したのです。流出した宝です。

文物が流れたと同時に自然破壊が始まりました。神仏分離令によって鎮守の森がつぶされ始め、そういう環境破壊が明治初年から始まっていました。それに猛然と反旗を翻したのが在野の科学者の南方熊楠です。この名前はどなたもご承知ですが、エコロジーの日本における先駆者です。この方は官学に対抗してアミニズム、植物学、動物学、民俗学をトータルして循環型の社会を実現しようということ、もう既に発表されていました。その後、京都大学の今西錦司博士の「生き物の棲み分け論」もその系統を引いていると思いますし、近年、青山学院大学の福岡伸一先生が補い合って生きる「動的平衡」ということをおっしゃっていますが、この系譜はずっと引いているのではないかと私は思っています。

そして、現在は第二次の廃仏毀釈の時代であると私は捉えています。なぜか。核家族時代、無縁死、無縁社会、世代間の隔絶、先祖や伝統を敬わない。仏教の衰退。日本の国家予算の中の文化予算は0.1%で、フランスの予算額の7分の1です。このように文化が喪失される、美しい自然が失われる、まだ今は環境破壊が続き廃仏毀釈の時

が尾を引いている。今でも文物は海外に流れています。国宝級の伊藤若冲の絵が近年アメリカの実業家の手に渡り、国宝クラスのもので最近でも出て行きます。それを見守っていたのは官僚でした。

『立正安国論』

しかし、今から750年前に、世法に対して仏法を正して安らかな国を建てようと訴えられた方がいます。その著者が日蓮聖人の『立正安国論』です。今日、『立正安国論』は、他の経論や人を批判する厳しい部分がよくないということで、封印論まで日蓮門下の中にはありますが、それには無理がある。鎌倉時代のものをそのまま現代に当てはめようとするから間違いになる。ですから、私はその精神を現代に継承すべきではないかと思っています。日蓮聖人がお書きになった「くに」という字は「□(くにがまえ)」の中に「民(たみ)」と書いてある。「国民」の「民」と書いて「くに」と読ませる字がたくさん出てきます。日蓮聖人は鎌倉幕府に意見を提出したと同時に国民の平和を訴えられ、国民のための浄土を訴えられていると思うのです。「立正安国論に学ぶ環境問題」として日蓮宗の中央教化研究会の記録に、「草木・国土成仏、人間を包み込んだ自然界の大きな循環を取り戻すには、一念三千に裏付けられた御題目を唱えることにより実践しなければならない」と出ていました。また、私どもの宗派の教学研究所の「環境問題を考える」という冊子には、「仏、菩薩の命そのものである自然界が、御題目を唱えることによって本来の姿として実現するときに初めて私たち人間の円満な姿、すなわち成仏の姿が顕される」と見えています。

私どもの宗派は御題目を唱えることにおいて人後に落ちません。そうすると、そこには仏国土のサンプルが見えてくるはずですが、理論的には、しかし、そこに私共の難題があるわけです。私も寺では30年以上、「寒行」と言い寒中行をやって御題目を毎晩唱えて歩いています。わずかに私の寺の鎮守の森はおかげか守られていますが、その周辺自然を見回すと愕然とする景観が広がっています。

私の寺の真ん中を新幹線が通っているのです。天皇陛下も大統領もお通りになります。お立ち寄りにはなりません。その裏には、第二東名高速の大工事が山を切り崩して行われています。後になってから、この道は必要かどうか。静岡空港もそうですが、後になってから本当に必要だったのか。既に大変広い面積の森林を伐採してしまいました。

その周辺は送電線、電力会社の鉄柱だらけです。何十メートルも高い鉄柱が日本の美しい山岳に林立しています。新幹線でご覧になると日本の景色は、街も山岳も鉄柱だらけです。ヨーロッパではそんな姿は見られません。美しい自然を持つ日本がなぜ、あんなに簡単に地獄の針の山のようにしてしまうのか。私は「緑と歴史を守ろう会」を立ち上げ、「美しい日本の山に鉄塔を安易に建てるのを止めよ」と20年間ずっと叫んできました。いくら御題目を唱えても叫んでもそこには届かないのです。なぜか。

政官財の人々の考え、またリゾート法などもそれを後押しして、実際には世法のそういうところで自然破壊が決まってしまうのです。

環境安国論

そして、私はこれではやはり観念、願法の仏国土を我々は夢見ているのではないか、なぜかみ合わないのだからかと考え、平成20年の法華宗の宗会の施政方針で「環境安国論」を提唱しました。つぶさには「環境蘇生安国論」です。『立正安国論』の今日の各論として環境を取り上げ、そう申したのですが、イギリスのホーキング博士は、地球のように文明が進みすぎるとその星は極めて不安定となり、加速度的に自滅する」と述べておられます。生物は地球上に3000万種から4000万種いると言われていますが、毎年4万種が滅び、山本先生のお話のとおりですが、その主な原因は人間がつくり出していると思います。弱肉強食の摂理が厳然として存在しています。

共生、ともいきというのは、理想論であると思います。このあいだ名古屋のCOP10でも生物の多様性について会議がありましたが、結局、資源とその利益の分捕り合戦が行われ、そこには経済市場原理が働いています。そこには政治・経済が入ってきますから、社会科学においても共生はなかなか進まないわけです。

共生という理想なのですが、自然科学でも社会科学でもなかなかそれがうまくいかない。共生の困難を越えるものは何か。それは蘇生だと私は思っています。命をよみがえらせる。私たちはほかの命をとって生きています。とらなないと生きられません。生きられませんから命をとって私たちは命を養っていますが、私はそれだけではいけないと思います。その罪を償わないといけない。罪障は消滅をしなければいけない。罪滅ぼしには何をするか。命を

いただく限りは報恩、恩に報いることをしなければならない。もっと言うと蘇生だと思いますが、他の命に施して初めて自らの蘇生があると思います。世界には利益を得るための教育はたくさんありますが、ほかの命に施すための教育は少ないと思います。

法華経の菩薩行の主張をする時、全日仏の長谷川弁護上に、「七千、八千寺院の法華の教団が何万の寺院の他の大きな集団を説得（折伏）できますか」と質問されました。相手にする法人数が少ない多くではなく、相手を自分と同一のものになるよう強いるとか、相手を責めるとかではなく、私どもは種をまくのが仕事です、仏になる種をまくのが私どもの仕事ですと申しあげました。日本のリーダー政界、官界、なぜこれだけ無駄遣い、天下りが止まないのでしょうか。政界人には哲学のバックボーンがあるのでしょうか。今は日本パッシングからジャパン・パッシングになっていると言われています。パッシングとはパスして相手にされなくなること。それはなぜか。

自然と心の蘇生

私は、今産業の空洞化と言いますが、日本人の心の空洞化だと思います。心の危機が環境の危機をさらに進めている。人の心の蘇生、それが自然環境を蘇生する。これが私はむしろ早道だと思っています。私は宗教と科学の接点は人の生き方としての菩薩行だと思っています。科学は自然の蘇生のため真理を実証する。宗教は心の蘇生のため信仰を実践する。自然と心の蘇生を進める実践の生き方、菩薩行は科学と宗教両者の接点になると私は考えています。

仏法の信仰、世法の報恩、仏法即報恩なれば、仏法が世法に影響を与えなければならない。蓮華は泥水に染みてはいけないということは、仏法は世法に染まってはいけないけれども、仏法がむしろ世法に影響を与えなければいけない。仏法が形而上学だけで仏国を論じているのではなく、現実の世の中の改善蘇生を実践する菩薩行が大切ではないかと私は訴えているのです。

私は自分の宗派のパフォーマンスをやっているのではありません。私どもの宗派は、宗派の一番大事な法規を全面改正しました。宗法、宗制、宗規、そしてその中に「菩薩行の実践」という項目を入れました。大改正したものです。仏教が人の生き方を示し、物質的にはほどほどの幸せを、しかし、ほかの命のために尽くす大きな幸せを得られるような世界を示すべきと思っています。

仏教環境倫理に基づく行動論はまだ構築がこれからと言われていますが、私はそこに菩薩行が入るべきだと考えています。人が10人いれば10の菩薩行があり、100人いれば100の菩薩行なので、全ての世界の人々にも呼びかけられるものではないかと考えられているものであります。

15分ではなかなか意を尽くせませんが、配布いたしました私共菩薩行研究所の『菩薩行』という本と、『今日の立正安国論を考える』の拙著がお手元にありましたら、またそれをお読みいただくと大変ありがたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

自然への感謝の心をどう養うか

深田伊佐夫

今日は、自然への感謝の心をどう養うかということについて、皆様とご一緒に考えさせていただきたいと思います。

それでは、スライドで進めていきたいと思います。ちょうどいま表紙のところですが、これは新潟県十日町市の棚田の風景です。これもやはり自然の恵みの一つを表わしているのではないかと思います。

まず、今回の報告の趣旨ですが、このようなことを考えています。現代の社会では「もったいない」という言葉を象徴するような生産や消費活動が依然として続いており、地球環境は再生不可能な段階に達しています。その中でこれを解決するためには政治、経済、技術といった分野からの取り組みも現在かなり行われていますが、いくら制度が整ったとしても、当事者である人間の意識が変わってこない、まさに「分かっちゃいるけどやめられない」というようなことの繰り返しの中で、こうした環境問題も解決できません。

その意味で、環境倫理をきちんと確立することが必要ではないかと考えました。ここではその第一歩として、自然への感謝の心をどう養うかというような観点から、「もったいない」「いただきます」といった日常の言葉や行動の中から何かできないかということについて、報告させていただきます。

まず、日常のもったいないということですが、自然界の分解・再生機能はもう限界を超えています。どうしても大量生産、大量消費、大量廃棄が当たり前となっていきます。普通の生活そのものが、「制度化されてしまった無駄遣い」という化け物のような枠の中に組み込まれています。普通の生活をする事自体が環境資源に悪影響をもたらしている。このような状況が出ています。

一方、南北問題とか、南南問題も、やはりこうした枠組みの中で資源と富の配分の格差から起きていていると思います。2010年10月に開かれたCOP10の中でも、生物資源の取り合いの様な場面も出てきたかと思えます。こうした状態をひと言で言うと、まさに「もったいない」と感じます。

どこにでもあるコンビニエンス・ストアの画像です。先日、コンビニに行って弁当を一つ買ったところ、バーコードを読みとったレジスターから変な音がして、店員から「これはもう時間が過ぎていますから取り替えます。」と言われ、その後、大きな袋に入れられましたが、あの弁当がどこへ行ったのかはよく分かりません。

東京の粗大ゴミです。実はこれはうちの玄関のところに扇風機を2台捨てた時の写真を使いました。四角い扇風機は30年前に買ったものです。故障したため直そうと思ったら、部品がないからだめだと言われました。もうひとつのほうは、3年前に買ったのですが、子どもがいたずらをして1回ひっくり返ったら軸が曲がってしまいました。修理してもらおうと思ったら、出張料と修理代が数千円かかると言われ、1980円で買ったものをそんなに高いお金をかけて直すのはどうかということで、もったいないけれども、やむを得ず先週の木曜日に捨てました。

大森貝塚です。記念碑が、京浜東北線の電車からもよく見えます。貝塚のもつ考古学的な価値とは別に、ある意味では3000年前の縄文時代の廃棄物処理の問題を象徴しています。

次は「自然の恵みに支えられて」ということで、3点ほど考えました。一つ目は、もったいないが当たり前になっている現代社会についてです。社会が、何によって支えられているかということ、太陽の恵みをはじめとした自然のシステムそして生態系に支えられていると思います。その中から生物資源と鉱物資源を取り出しています。しかし、その恵みを、一定の秩序と限界を保ちながら人間の生活や消費に向けていけば、理想的な生態系の循環が可能にな

ります。



写真1：二次自然林の景観（東京都青梅市内）

よく、森の恵みということが言われます。これは、身近な里山の雑木林の様子ですが、こうした森というものによって、この社会も支えられています。

すごいごちそうが出てきました。先週、ある会合があって伊豆へ行ったときのものですが、こうしたものもやはり自然の恵みということで、これもおいしくいただきました。

から	自然システム	生物システム	人間・社会システム
太陽を含む自然システム	・自然の輪廻 (地球科学)	・光合成 ・植物の生育 ・動物の繁殖	・人間の生産と生活へのエネルギー供給
生物システム	・生物体の分解	・狭義での生態学の諸理論 (生態学)	・同上 ・特に食糧、木材などの供給
人間・社会システム	・廃棄物の垂れ流し ・自然の破壊 (環境問題・災害)	・生物空間の圧迫 ・生物システムの攪乱	・社会の変化の諸理論を含めた生態学 (経済学)

表1：自然システム・生物システム・人間、社会システムの相互関連（井東 1991 より転載）

二つ目は、人間と社会と自然の関わり合いと支え合いについてです。これらのことについて、井東による分類図によって整理してみます。まず、何から何へということ考えると、縦のほうは「から」です。太陽を含む自然のシステム、生物、最後が人間社会システム。いま一番問題になっていることは、図でいくと、左下の欄の二つ目のところ。自然のシステムに対し、人間社会のシステムの中から廃棄物の垂れ流し、そして自然破壊が公然と行われています。この中から、いわゆる環境問題、そして災害も発生してきます。

三つ目は、私たちの先祖はどんな知恵を持って自然の恵みを意識していたかということについてです。少し事例を踏まえて紹介します。これは、「信仰による秩序と限界の抑制」ということになると考えました。一つには、自然の恵みを授かり物として意識し、それを得る上で秩序と限度を信仰的な態度によって抑制してきました。そこには自然の対象物のすべてに神様、仏様の存在があることを信じ、それらに対し畏敬の念を持ちながら祈りを捧げてきました。日本にはこのような美風がありました。

ここでは、信仰による秩序と限界の抑制について二例ほど紹介したいと思います。先ほどの藺田先生の話にもありましたが、こうした各地での祭礼、自然信仰は日本人の美風だったと思います。例えば春と秋のお祭りと言いますが、これもやはり春にはこれから農事を始めるための祈りが捧げられ、そしてまた秋のお祭りになると、収穫への感謝として、また農業のために活躍した神様をいたわり、また神様に山に帰ってもらい、そこでエネルギーを注入し再生するというようなことが背景にありました。ほかにも命の根源としての「水」を神様に見立てて尊崇するような、とにかく自然に対して感謝を捧げてきたようなことが見られます。



写真 2：自然への感謝の心が信仰の原初形態（神戸市・長田神社）

それから、水神を祀る御宮ということで、那智大社、貴船神社、大宮神社も全部、「水」への感謝の祈りを捧げるものになります。また、東京の多摩川でも、少し前まではこのように御神輿を川の中に入れ、雨乞い、あるいは洪水・氾濫が起きないようにというような祈りを捧げてきました。

次は開発と環境、そして神仏ということについてです。高度経済成長期には、急速に進んでくる宅地造成と自然環境がどうも不調和な状態になり、年中行事のように土砂災害が発生していました。私自身もある機会に神奈川県川崎市市内での調査をかなり詳細にやった時期があるのですが、ここで面白かったのは、災害が起きるような危ない地形のところには必ずお寺や神社があります。周りでは家が全部崩れるとか大変な事故が起きているにもかかわらず、そのお寺や神社は全く無事である、どうしてなのかということずっと考えていました。

これは新聞の切り抜きですが、このようにたくさんの人が亡くなるようなことが 1960 年代から 80 年代に起きていました。

これは 2003 年に起きた山崩れの画像です。ところが、この山崩れの下のほうのお寺は全く影響がありませんでした。土砂にやられてしまった人たちがお寺に避難していたということです。

そこには神様、仏様を祭ることによって災害から助けてほしいという素朴な祈りを捧げてきたことと、人間の過剰な開発のような、とにかく自然をいじくることを食い止めるために、山の裾のところに神仏を祭り、一種の結界をつくったのではないかと。こんなところから皆さんの素朴な祈りが捧げられてきました。これもやはり自然に対する感謝の表われではないかと思いました。

それでは、自然への感謝の気持ちをどのように養うかということをつたう三つの視点から考えてみたいと思います。やはりいろいろな場面から考えなければ、そしてまた実行しなければならぬと思います。一つ目は、宗教的な価値観に基づく環境倫理の提唱と実践。二つ目は、教育場面における環境教育の実施。それから、家庭内での環境配慮行動の積み重ねを心がけることが必要になるのではないかと思います。一つひとつ追ってみたいと思います。

まず、宗教界です。多くの宗教では命の根源に対する畏敬や感謝の念を抱く価値観があります。この価値観は究極的には自然への感謝の心を養うことにつながります。

このことは、自分の宗教の教義に基づく環境観と環境倫理を信者の教化育成の一環として啓蒙する。仏教系の団

体などでは、自然と人間、人間と人間との調和、先ほどの立正安国論もそのことが神髄と理解しています。あるいは小欲知足に代表されるシンプルライフの提唱、その生活実践を皆さんにお知らせする。今回のシンポのようにさまざまな分野との連携が必要と考えました。

私ども立正佼成会でも先般、生長の家からの指導を受け、ISO14001の取得をするとともに、信者とともにそうしたシンプルライフを考えていきたい。そしてまた実践で鍛えるということを始めたい。

次は、学校教育の場面です。公共の教育の場ではこうした道徳や宗教の教育はなかなか難しいのですが、その中でも関連していることがあるのではないかと考えました。理科教育の単元の中に自然や生態系を教えている部分、また、環境教育も実施されているので、そうした切り口から、自然に支えられていることを理解できるような動機付けをしてゆく。こんなことができるとよろしいのではないかと思います。具体的には野外体験学習、農事教育、食育、ネイチャーゲームなどが自然への感謝を養ういい事例になると思います。

次は、家庭の場面です。やはり食事の場面で「いただきます」「ごちそうさま」ということを強調し、そういう言葉をとにかく大事にしていく、そしてまた発してみることです。

そして、食事は残さずきれいにいただくということです。うちでもやったのですが、ときには茶わんに残ったお米などから、一粒からどのくらいのお米が取れるのかということ、親子で話し合ってみるのもよいと思います。

それから、あったら便利なものは、意外となくても間に合ってしまうものが多いわけです。その辺をよく見極めて過剰消費を避けるということでしょうか。こんなことが必要と思いました。あとは紙、水道、電気などのエネルギーの節約、排出するゴミ量のリサイクルを図り、シンプルライフを実践。

最後、まとめです。まず、自然への感謝の心をどう養うかということについて三つの視点から考えてみましたが、ある意味で、ここで述べてきたようなことをするとすると、不自由な思いというか、今の生活より少し不自由なこともしなければならぬかもしれません。なぜかという、金さえあれば自由にものが手に入り、自己主張をすることが最も合理的で妥当性があるのだという時代です。その中で少し小欲知足、あるいは自然への感謝の心を養うということは、不便な思いをするかもしれません。

しかし、よくよく考えてみると、本当に自分たちが生きていくためには、こうした少し不自由で不便なこ思いをしながらも、自然への感謝の心を養うという実践をしていくことが必要ではないかと思います。すべての命が共に生きるための知恵として、すべての地球市民が共有化するような価値観になっていくのではないかと考えます。

また、方法論、具体論について今日は省きましたが、とにかく身近な実践をお互いにだんだんに積み上げるところに、恐らく理想的な姿が出てくるのではないかと、今回はお話しさせていただきました。以上です。どうもありがとうございました。

ISO14001 認証取得から“炭素ゼロ”へ

山岡 睦治

今日は「ISO14001 認証取得から“炭素ゼロ”へ」というタイトルで、生長の家が現在取り組んでいる環境保全活動について紹介したいと思います。

まず最初に、生長の家は環境問題をどう捉えるのかと申しますと、環境問題は人類史上、未曾有の問題である、また、伝統的宗教が出現した時代にはなかった問題であり、産業革命以前にはなかった問題であると考えられます。もう少し言いますと、三つあります。一つ目は、個人を超えている問題で、未来世代に影響を及ぼすという世代間倫理の問題である。二つ目は、国家の枠組みを超えていて、国益優先では乗り越えられない問題である。三つ目は、人間中心主義からの脱却が求められている。つまり、欲望優先主義の人間が自然から奪ってきた問題であるという捉え方をしています。これは私どもの総裁の谷口雅宣著『今こそ自然から学ぼう』（生長の家刊）の中で指摘している内容です。

生長の家ではこの認識を踏まえて、ISO14001 認証取得に取り組むわけです。この認証取得にあたり、生長の家は環境方針を定めました。それを紹介します。

環境方針の「基本認識」でこうなっています。

地球環境問題はその影響が地球規模の広がりを持つとともに、次世代以降にも及ぶ深刻な問題である。

ここの「地球規模の広がり」という言葉に、先ほどの“国家を超えている”問題であるという認識が込められています。「次世代以降にも及ぶ」という言葉に、“世代間倫理”の問題であることが込められています。

今日、吾々人類に必要とされるものは、大自然の恩恵に感謝し、山も川も草も木も鉱物もエネルギーもすべて神の生命、仏の生命の現れであると拝み、それらと共に生かさせて頂くという宗教心である。

ここに、先ほど3番目に挙げた人間中心主義からの脱却は、人間が自然から奪うのではなく、「共に生かさせて頂く」という文言に現れている。これが私どもの自然に対する態度であると考えられます。

この宗教心に基づく生活の実践こそ地球問題を解決する鍵であると考えます。

生長の家は、昭和5年の立教以来、“天地の万物に感謝せよ”との教えに基づき、全人類に万物を神の生命、仏の生命と拝む生き方をひろめてきました。

生長の家は、この宗教心を広く伝えると共に、現代的な意味での宗教生活の実践として環境問題に取り組み、あらゆるメディアと活動を通して地球環境保全に貢献し、未来に“美しい地球”を残さんとするものである。

この環境方針は、2000（平成12）年10月11日に発表されたものです。“天地の万物に感謝せよ”の文句に、

すべての自然と人間との関わり合いや天地自然に対しては感謝を持って臨む、これが生長の家の教えであることが表されています。この基本認識のもとに環境保全活動に取り組むことになるわけです。

次に「ISO14001」とは何かをおさらいしておきます。これは、環境マネジメントシステムを運用することによって、地球環境に配慮した方法で事業や活動を展開する企業や団体が国際的基準に達していることを、第三者機関によって認定してもらう制度です。具体的には、先ほど紹介したように環境方針を策定します。そのもとにPlan（計画）を立てる。つまり、環境に影響を与える活動を明確にし、その改善に向けて目的・目標を設定します。Do（実行）は、環境方針や目的・目標を団体の構成員に周知徹底し、これを達成するように取り組みます。Check（点検）は、団体内部の勉強会、内部監査等により自らの実行状況を点検します。そしてAct（改善）は、点検した結果を受けて、さらに実効性のある環境マネジメントシステムに改善を施していきます。こうしてPDCAを繰り返し行うことにより、システム全体を向上させて環境負荷を低減させていこうというのがISO14001の取り組みです。

具体的に、生長の家は2001年に本部事務所（東京・原宿）と総本山（長崎県西海市）がISOの認証を取得し、2007年に2つの関係団体を含めて66の全事業所の取得が完了し、現在継続をしています。2つの関係団体を除いた64事業所で2002年から図1のようにCO₂の排出量を低減させてきています。2009年までの削減量を金額に換算すると、約1億円となり、それらの経費を大幅に削減していることになります。

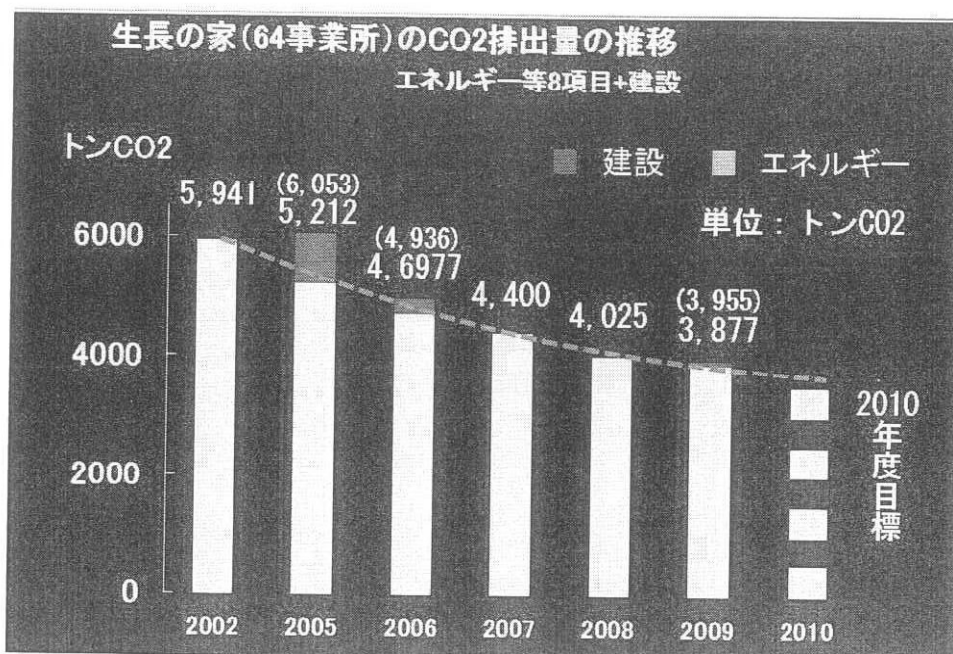


図1：生長の家のCO₂排出量の推移

これはCO₂排出を削減する行動ですが、その一方で、私ども宗教団体の特徴ある取り組みとして教団内外に向けた啓発活動を行っています。1番目に生長の家総裁、白鳩会総裁の活動があります（図2）。例えば講習会は年間約30回開催しており、2年で全国59教区を1回りします。昨年度と一昨年度を合わせて59教区で約28万人が参加しています。この講習会の講話の中で、両総裁自らが環境保全についての啓発を行っています。4番目に書いてありますが、両総裁は、インターネット上のブログを通じて、環境保全に関連する記事などの情報を発信して、これが、私どもの教団の特色にもなっているところでもあります。

そのほかにもいろいろな啓発活動をしています。例えば「生活の記録表」（図3）を作って、組織の会員（約5万5千人）に配布をしています。家庭での電気、ガス、水道、ガソリンなどの使用量とCO₂排出量を記入してもらいます。その中に「肉食しなかった日数」を記入する欄を設けています。肉食は不殺生の宗教的立場からだけでなく、その生産段階で環境に負荷を与えることから控えることを勧めています。会員に対しては、この記録表にデータを記録しながら、CO₂の排出削減に取り組んでもらうように呼びかけているところです。

教団内外に向けた啓発活動

1. 生長の家総裁、同白鳩会総裁の活動

- ①講習会(年間約30回)、全国幹部研鑽会(2回)、全国大会(1回)での講演
- ②単行本、講演CD等の出版
- ③会員向け機関紙誌、一般向け月刊誌への原稿の掲載
- ④ブログの記事による情報発信

2. 月刊誌3種、機関紙誌の特集や取材記事

3. 公式ホームページ、インターネット講師のブログ、SNSの活用

4. 本部講師によるラジオ放送(1講師が1ヶ月間毎週1回担当、このうち1回は「環境保全」がテーマ)

5. 本部及び教区主催の行事、第一線の誌友会の講話等

(本部講師、地方講師の試験には環境に関する問題が出題されるため、同問題の講話力のある講師が養成されている)

6. 全会員に「生活の記録表」を送付し、活用を促す

図2：教団内外に向けた啓発活動

生活の記録表 2010年度版												年度集計			
												総CO ₂ 排出量 (表の①-⑤を合計) kg	カーボンオフセット 購入量 kg	わが家の CO ₂ 排出量 kg	わが家の目標 kg 以下
電気 係数 0.39			都市ガス プロパンガス 係数 2.1 係数 6.5			水道 係数 0.36		灯油 係数 2.5		ガソリン 係数 2.3		肉食しな かった日数			
月	使用量(kWh) CO ₂ 排出量(kg)	料金(円)	使用量(m ³) CO ₂ 排出量(kg)	料金(円)	使用量(m ³) CO ₂ 排出量(kg)	料金(円)	使用量(L) CO ₂ 排出量(kg)	料金(円)	使用量(L) CO ₂ 排出量(kg)	料金(円)					
4												日			
5												日			
6												日			
7												日			
8												日			
9												日			
10												日			
11												日			
12												日			
1												日			
2												日			
3												日			
合計	①		②		③		④		⑤			日			

◎ CO₂排出量の計算式：使用量 × 係数 = CO₂排出量(kg)
(CO₂排出係数は環境省が公表する環境家計簿用の数値を使用)

炭素ゼロ実現! この「生活の記録表」の印刷工程のCO₂およびお手元に届くまでの輸送CO₂をグリーン電力でオフセットし、炭素ゼロを実現しました。

図3：2010 生活の記録表

具体的に、私どもの啓発活動によって会員や地域でどのように取り組みが行われているかという一端を紹介しま

す。
地域で開く“誌友会”と呼ぶ会員や新人が集う小集会で環境保全を学んでいます。図4は岡山教区の白鳩会(女性組織)の「ノーミート料理」をテーマにした誌友会の模様です。教えを学びながら、肉抜きでおいしい料理を学んでいます。それから、「植樹、植林」をテーマにした誌友会。図5は栃木教区で取り組んだ時の模様です。足尾銅山跡に5回で800本近くを植樹しています。



図4：ノーマイト誌友会

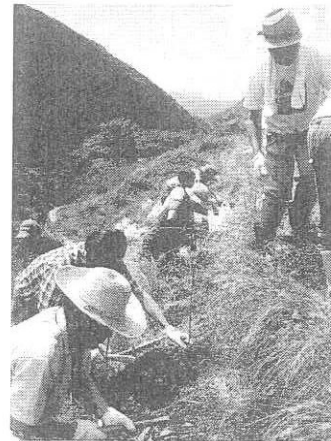


図5：植樹栃木

この画像（図6）は、生長の家で初めて電気自動車を購入した白鳩会の会員です。現在、教団では会員が電気自動車を導入する場合、上限30万円まで助成をしていますが、この会員は助成を受けた第1号となりました。

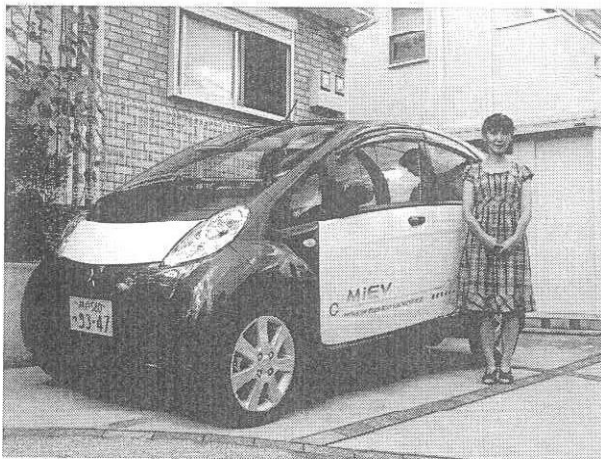


図6：電気自動車（兵庫）



図7：太陽光発電（千葉）

太陽光発電装置の導入も啓発しています。これは千葉教区の青年会員宅の画像で（図7）、3.29kWの発電出力です。会員が太陽光発電装置を導入する場合に対しては、1kWあたり5万円の助成をしています。太陽光発電装置がどの程度導入されているかを見ると、会員への環境保全意識の浸透度が分かるのではないかと思います。生長の家全体の発電容量を合算した数値（図8）を、教団の月刊誌等に毎月公表しています。

10月15日の集計で、事業所が1,566kW、個人宅に太陽光発電装置を設置しているのは774人で計3219,48kW、合算しますと4723.12kWとなり、年間でCO₂を1,842トンを削減していることとなります。メガワット級の太陽光発電所と言えば非常に大きなものですが、生長の家では、既に4.7メガワットの太陽光発電所を持っているということになります。

ISO 14001の導入を選択したメリットは数々あります。列記しますと――

国際的な指標である／客観的な指標である／独自性を生かせるものである／網羅的取り組みである／永続的取り組みである／無限に向上（改善）できる／透明性がある／見える化（数値化）できる

この中の永続的、網羅的な取り組みであるということは非常に重要で、環境の取り組みというのは一部の取り組みとか、一時的な取り組みではもう間に合わないわけです。ですから、網羅的でないといけないし、永続的でないといけない。



図8：太陽光発電所

それから、「透明性がある」ということは、宗教団体にとって非常によいことです。ISO14001は外部の審査機関による認証ですので、「開かれた団体」であることが認知されることになるからです。

「見える化（数値化）できる」という点もメリットです。ISO14001の取り組みによって、CO2の排出量が数値化されたことで、削減の方法が具体化されました。そして、この排出量が見える化がされたことによって次のステップとして、私どもは“炭素ゼロ”運動を2007年から開始することができたのです。図9が炭素ゼロ運動を図式化して表現したものです。日常の業務の中で二酸化炭素排出の削減努力を重ね、それでもなお削減できなかったCO2を自然エネルギー、植林、グリーン電力や排出権で相殺し、ゼロにしようという運動です。すなわち、私たちの教団の活動によって排出するCO2はすべてオフセットしようという取り組みなのです。

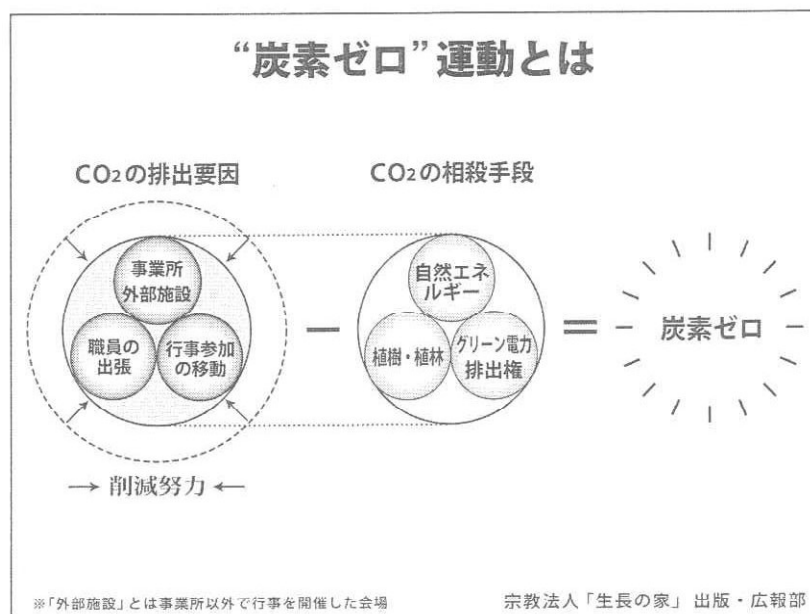


図9：炭素ゼロ運動

教団の活動によって排出されるCO2の把握というのは、職員の出張によるものも含まれます。どれだけ細かいのか、象徴的なものだけを一つ言います。私が今日、このシンポジウムのために、東洋大学に外勤扱いで参りました。

外勤の場合は自宅から計測するのですが、自宅から外勤先までの交通機関の利用（往復）によってどれだけCO2が排出されたかを計算して、「移動CO2排出量報告書」（図10）に記載し、交通費の請求書と一緒に提出します。これは提出しないと交通費が支給されないことになっています。非常に手間がかかるのですが、そういうことをやっています。とにかくCO2排出量を見える化して、それについては相殺するという考え方でやっています。

Ver3
2019.04.18

移動CO2排出量報告書 <出張・外勤用>

※「事前出張チケット精算書」にはCO2報告書は不要です 平成22年10月29日

所属	出版・広報部	氏名	山岡睦治	印	所属長
日程	出発・平成22年10月21日 ~ 帰着・平成22年10月21日				
行先	① 東洋大学 (文京区白山)	②	③	④	
<small>※[行先]欄には、生長の家の事業所略称を、外部会場の場合は教区名と会場名を記入してください。 ※運動推進などで教区内を移動する場合は、「〇〇教区内運行」などと記入してください。</small>					
月日	交通機関	移動区間	※乗換えが分かるように詳しく記入してください		CO2排出量 (kg)
8/26	バス、小田急、東京メトロ、都営三田線	大沼小学校前	→ 相模大野 →	代々木上原	0.940
		→ 日比谷 →	白山 →		
8/26	バス、小田急、東京メトロ、都営三田線	白山	→ 日比谷 →	代々木上原	0.940
		→ 相模大野 →	大沼小学校前 →		
合計					1.880

1. 本報告書は、本部事務所勤務者の全ての出張・外勤の「旅費精算書」「交通費精算書」に必ず添付してください(いわゆる外出も含みます)。

2. 「事前チケット精算書」の場合は、当報告書を添付する必要はありません。ただし、最終精算の「旅費精算書」には、必ず「事前チケット」の分も含めた全旅程のCO2を記載して添付してください。

3. タクシー、公用車、レンタカー、及び「駅すばあと」で出ないバスなどの場合は、利用区間の余白欄に乗車距離数(km)、又は、「最寄り駅CO2」より”と記入してください。

ISO推進支援部	財務課

Ver2 2019/04/18 生長の家本部事務所ISO推進支援部

図10：CO2 排出量報告書

さらに、ISO14001の導入によって宗教界の協力・連携が可能になるというメリットがあります。今までパネリストの皆さんがお話をされた地球環境や自然に対する考え方の根幹部分は、同じことを言っている。それは、人間をその一部として包み込んできた自然を神の創造、もしくは仏の現れとして尊ぶ思想です。もっと圧縮すると、“すべては一体である”ということでありまして、それが共通しているのではないかと思います。この共通している部分を各宗教教団がそれぞれの「環境方針」に盛り込むことによって、互いの協力していきけるのではないかと思います。

先ほど立正佼成会の深田伊佐夫先生からの発表にもありましたが、立正佼成会がISO14001を認証取得するに

当たりましては、生長の家から関連する情報を提供させていただきました。そして、立正佼成会が作られた環境方針は大変すばらしいものであり、少しだけ紹介します。基本姿勢の中に「命の尊重」という項目があります。

人間のいのちも、山川草木といった地上に存在するすべてのいのちも「永遠のいのち」の一つの現れであると自覚し、その尊いすべてのいのちを敬い、感謝する心を育みます。

これは「生長の家の環境方針」というタイトルを付けても通用するような内容ではないでしょうか。このような基本姿勢が共通しているならば、地球環境問題についての宗教間協力がスムーズに行われると考えるわけでありませぬ。

私どもの総裁は、地球環境問題について宗教者の果すべき役割としてこう述べています。

現在の資本主義経済は一種の“欲望増幅装置”のような役割をはたして地球資源の枯渇を加速させている。だから私は、宗教はその欲望を沈静化し、「足るを知る」倫理を広め、さらには「与える」喜びを拡大していくべきだと思う。すでに与えられている全てのことを十分味わって感謝し、余分のものは他へ回していく。そういう布施や、菩薩行、愛行の原動力として、宗教は進むべきである。地球温暖化時代には、宗教者の役割は実に大きいと言わねばならない。(『小閑雑感 Part14』122頁)

まとめになりますが、“すべては一体である”という宗教的信念をもとに、私どもの教団は、ISO14001の認証取得をして、それを本部や各事業所の職員自らが実践するとともに会員、信徒にこれを広めていきます。それによって、今、奪う心によって自然破壊をしているこの社会を、与える心によって自然と人々が調和する方向に変えていく原動力になっていきたいと考えます。

すべての人々が皆神性・仏性を持っているというのが、私どもの宗教的信念でありまして、私たちの心を掘り下げていくと、“すべては一体である”という岩盤にあたるはずなのです。ですから、ここを共通ベースにして宗教が環境問題に取り組んでいく、ISO14001の認証取得に取り組んでいけば、各宗教教団の独自性を生かしながら、低炭素な社会を実現していく大きな流れを作ることができるのではないかと考えています。

最後に、私ども生長の家は、ISO14001の認証取得をしようという教団がありましたら、積極的に情報提供をさせていただきますことを申し添えておきます。ご清聴ありがとうございました。

環境・温暖化とエネルギー

桑折 範彦

実は最初から言い訳をしなければいけないのですが、本日は仏教の方々の中に混じって、キリスト教という立場を別に言うことはできません。特にキリスト教の信徒で、また、ここに書いてあるように日本聖公会という英国国教の流れをくんでいる教団に属していますが、その代表でもありません。今までの方々は多少なりともそういう話、それからエコロジーからムーブメントを立ち上げておられる話でしたが、私は特別そういうことをしている人間でもありません。たまたまこのシンポジウムを企画している西山先生が、私の大学時代からの友達で、私は原子力に多少関わるようなフィールドで研究してきたということで、今日は「環境・温暖化とエネルギー」という話をさせていただこうと思います。

主なことについては、先ほど山本先生から非常に明確な話があり、それを上回るようなことは何もありませんが、エネルギーという面を中心に環境や温暖化について考えたことをお話したいということです。人類が必要としているエネルギーや、地球の温暖化、さらにエネルギーを開発するといったことについてお話したいと思います。

人口の増加が問題になります。特に開発途上国といわれている部分の伸び率が大きい。アジアは世界の半分以上の人口を抱えています。先ほどの話にもありますが、人口は2030年には2000年の1.3倍ぐらいになっています。一方、それに伴いエネルギーがどれだけ使用されているか、あるいはその予測があります。特にアジア地域は現在の2.6倍ぐらいになるので、これまでの人口増加によるだけではなくエネルギーの消費が大きいということです。

時間がありませんからざっと見ていただくと、一人あたりのエネルギー消費量はどこが問題かが明らかです。アメリカは中堅の国の倍を使っています。それから、新興の中国がだんだんと大きくなってきており、いずれこれはここまで来ます。

それからGDP、いわゆる経済活動の指標とエネルギーの指標は相関があるということです。発展途上国はこれから経済的発展を狙っているわけですが、そのためにはエネルギーがどうしてもたくさん必要であるということになります。

地球の温暖化のことについては、先ほど山本先生からたくさん話がありました。全体から言うと、1000年ぐらいから概観すると上がったたり下ったりしている。1900年ぐらいから拡大すると、このようになっているということで、だいたい±0.5℃の範囲ですが、先ほどの話だと、こんなものでは済まないと考えられているということです。

また、CO₂もそれに呼応していろいろなデータが出ているのを、スケールを合わせるような形で考えてみると、この辺のことを表すと、平らに書いてありますが、それをミクロで見ると上がったたり下ったりしている。これは夏と冬の違いであるというようになっています。これはパーセントで言えば、CO₂の濃度は、わずか20年ぐらいですが、85年ぐらいから2000年ぐらいまでをとっても15%ぐらい上がっている。

温度はどこが零点がよく分かりません。通常、0℃から言うと常温から273℃も下がったところが絶対零度ですが、それでも見えている範囲で、摂氏で言っても3.5%の温度変化です。ところが、これは生命体にとってはとても大きな変化になる。

CO₂の排出量についてのデータがあります。左側は総量で、こちら側は一人あたりです。こうして見ると、総量としては英国、アメリカの突出、それから中国の突出があります。また、日本も量的には4分の1ぐらいですが、2番目に位置しています。アジア途上国ではインドが、やはり新興国というか発展途上ということと、人口が多い

ということが寄与していると思います。先ほど来の話から言えば、アメリカと中国が入らないで、排出を削減することにはなかなか大きな問題があるということが分かります。

これはエネルギーの開発の予測について示されたものです。多くの国は原子力発電に興味を持っています。昨今の新聞紙上でも、中国、ベトナム、中東で原子力開発が求められていて、日本はそういう技術をたくさん持っているので、それを提供する、あるいはそれを日本の経済的な発展の目玉にしようと考えられているということです。

原子力発電のいい点は、大出力のものが1カ所につくれて、定常的に一定の電力を供給することができることと、いま問題にあるCO₂の排出が非常に少ない。それは当然のように思います。燃やしているものが、「燃える」という概念が違います。昨今は原子炉でも経済性、安全性が考えられたものが計画されています。

しかしながら、長い目で見ると、廃棄物の問題を含めシステムが完成していません。特に日本でも、どこに廃棄するかが決まっていないので、こういう点は皆様もご承知のように子々孫々ということで、今は子々孫々はCO₂のところでも問題ですが、原子力でも問題です。

高速増殖炉ということがたくさん問題視されているわけですが、これはどうしても核燃料サイクルの中でできるものが核兵器に転用できるといったことがあるので、高速増殖炉が望まれています、なかなか発電にまで行くのには大変ではないかと思えます。

やはり世界が平和でないと成り立たないシステムではないかと思えます。事故への対応や、紛争だけではなく、地震も問題があろうかと思えます。

これは核燃料サイクルですが、お話ししません。

エネルギーの見通しについては、やはり中国が原子力発電の計画等で最も突出しています。このような場所に34カ所も考えられている。ベトナムもいくつか考えられている。中東はロシアからのエネルギー依存から脱却したいという気持ちがあるので、原子力に頼りたいという話があります。

世界の現状で言えば、日本は3番目に原子力発電所が大きいわけです。皆さんご承知のように、日本でもすぐにも沢山欲しいのですが、つくる立地がなかなか認められない。ドイツにしてもアメリカにしても、これまで原子力発電をしないようにと考えてきたのですが、今のような状況もあり、それを延命するとか、新しくつくるという計画がなされるようになっていきます。

再生可能なエネルギーは、先ほど来の話にあったようにいろいろな工夫がされている。しかし、太陽光、太陽熱、風力はお天気次第のところがあるので、不安定。一定の電力を供給することがなかなか難しいので、最近のインターネットを使ったり、それぞれの発電のところにメーターを置いたり、情報を提供する装置を置いて、それをコントロールする。そういうものをスマートグリッドと言っていますが、そういうものがないと成り立たないので、我々が必要とする太陽エネルギーを賄うのには若干不安もあり、未熟なものかと思っています。

洋上の風車もだいぶつくられていますが、だいたい原子力発電所は一つ100万kWぐらいあります。ところが、風車はだいたい100kWなので、風車1個を1000ぐらい集めないと原子力発電にならないとなっていて、現状としては、日本は非常に立ち後れているというようになっています。フランスは80%ぐらい原子力発電ですが、日本よりずっと進んでいるということです。

まとめです。地球上では人口の増加がトータルな使用エネルギーをどんどん増やしていくことになります。それは先ほど来の話にあったような、人間存在というか、我々あるいは社会的な動きが非常に欲望的というか、自己増殖的なので、地球の環境問題を引き起こしているのは社会的な存在としての我々の活動そのものでありますから、我々が何か考えない限りいけないということです。

私の結論は、山本先生のような強烈なことが言えませんが、いろいろ可能なエネルギーを我々が一つひとつ、先ほどの生長の家のようなもので言えば、減らしていく。そういったことに思いをいたすことが必要ではないか。これは特に、格別にキリスト教とか、仏教というような立場からではなく、普通に我々が生きていくためにはそのように考えてやっていくのだというようなまとめにさせていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

持続可能なシンプルライフのすすめ

内藤 歆風

1. シンプルライフ普及センターの設立まで

ご紹介戴きました NPO 法人シンプルライフ普及センターの内藤歆風です。静岡県伊東市で、朝善寺という日蓮宗寺院の住職を本業としています。このたびはシンプルライフ普及センターが推進しております「持続可能なシンプルライフのすすめ」のあらましを説明することで、低炭素社会実現にむけた支援活動の一環となりますように願って、本シンポジウムに参加をさせていただきました。宜しく願いいたします。

さて、私たちの運動の趣旨を一口で申し上げるとすれば、それは「少欲知足」という、たった 4 文字にまとめられます。この言葉は、釈尊の生涯最後の 10 年間に説かれた法華経の、その最後の經典である普賢菩薩勸発品に見えますが、全部で二十八品、69,384 文字にもおよぶ法華経のうちの、そのたった 4 文字に凝縮された深遠な智慧を現代に展開する運動であるとも考えております。

それでは先ず、今なぜシンプルライフが必要なのか、ライフスタイルの変化という面から申します。お手元の資料をご覧ください。

私たちの暮らしに必要なさまざまな資源、エネルギー、食料、水など各々を環境容量として捉えると、それを地球の人口で割ったものが一人あたりの各々の分け前（環境容量）になるわけです。日本人のライフスタイルは、環境容量の視点から考えると、既に 2010 年には 1.33 個分の地球資源が必要になってきている。1985 年当時の地球社会は、ちょうど EFP（エコロジカル・フットプリント）=1.0 の限界を超えて、その後わずか 25 年で地球資源を 33% も越えてしまったわけです。事態がこうなった原因は、過剰な豊かさをひたすら追い求めた 20 世紀の消費文明にあるのではないのでしょうか。

そこで私たちは持続可能な改革・変革をしなければいけないのですが、その際、イギリスの環境運動指導者ジョナサン・ポーリットの言葉を借りれば、「さまざまな行動計画に先立ち、まず私たちの価値観、思想、行動、ライフスタイルにおいて根本的で持続可能な変化が起こらなければ、伝統的な政治改革の範囲を大きく変えるものにはならない」だろうと考えております。

このメッセージを、現在のシンプルライフ普及センターの追い風にしているわけです。2009 年 6 月にイタリアで開催された、WCRP（世界宗教者平和会議）の第 4 回諸宗教指導者会議で、ローマ法王庁バチカン諸宗教対話評議会議長のトーラン枢機卿は、同じ趣旨として日本の代表団に向かって「宗教者が率先して人間や自然、将来世代を意識した新しいライフスタイルを示すべきである」と呼びかけています。日本の宗教界としても、深く関わっていかねばいけないテーマの一つでしょう。

さて、時系列としてはそれ以前、シンプルライフ普及センターの母体になりました「20 世紀豊かさ文明シンポジウム」（モノの豊かさより心の豊かさを考える充足革命の提言）が、2000 年 6 月、伊東市川奈で開催されました。そのときの成果の一つとして認識されるのが次のことです。

すなわち功利主義的な近代社会において、経済学的な豊かさ・幸せ・幸福を考える際に、ジョン・スチュアート・ミルの同時代人であるトーマス・カーライルは、財を分子、欲望を分母に見立てて、「豊かさ・幸せ・幸福 = 財 ÷ 欲望」の式で表されると考えました。ところで、財は算術数的に増加しますが、欲望は幾何級数的に増加するわけです。こうした情勢を背景として、結果的に、20 世紀文明は持続不可能な消費の結果を招いたと言えるでしょう。

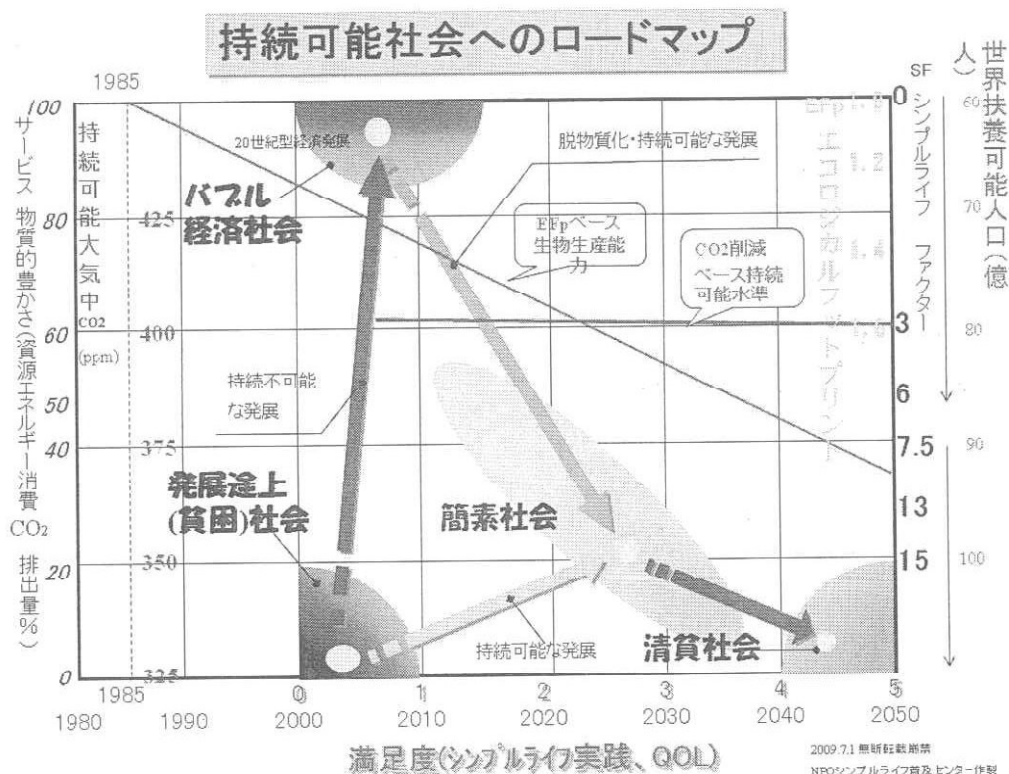
また、そのシンポジウムの成果として「充足度」という概念を新たに導入できるのではないかと私は思ったので。これは分子に満足、分母にサービスという要因を入れて得られる計算結果で表現されます。

$$\text{充足度} = \text{満足} \div \text{サービス}$$

この評価数式を物差しにして、これからの持続可能な社会を作っていくのではないかと考えました。その上、この考え方の実効性の確認をすることと、先ほど基調講演で山本先生から低炭素革命にむけた新しいライフスタイル・モデルの必要性が提唱されましたが、こうした事柄の啓蒙普及を担ってくれる実働組織（現在のNPO法人シンプルライフ普及センター）の必要性もすでにそのとき提言しておりました。

2. 持続可能社会へのロードマップ

ここでは具体的に、21世紀の持続可能な社会は、どんな社会かをわかり易く絵の形にしたいと思います。今しがた申しました「充足度方程式」では、分母にサービス、分子に満足という概念を入れて考えました。ここでは、ご覧戴くように縦軸にサービス（物質的な豊かさとして資源やエネルギーの消費量）や炭酸ガスの排出量も表示しています。横軸には先ほどの非物質的なくらしの豊かさとして満足度を表示しています。



この図によって、現在の世界は3つの社会様式に大分類できると思います。図の一番下向かってやや左側の少し紫がかった色の部分の領域にある国々は、物心ともに貧しい社会です。日本の終戦直後のような、あるいは貧困と飢餓に悩んでいる社会をかかえたアフリカの多くの国がここにきます。次いで、日本のかつてのバブル景気の頃のように、精神的豊かさの世界を置き去りにして、サービスのみをひたすら追い求めた社会が図の上辺にきます。バブル社会として、現在の中国やインドのような国が入るかもしれません。最後に、きわめて少ないのですが、ブータンのような、モノの豊かさより心の豊かさ、幸福を志向している社会があります。これは右下の位置に入る清貧社会の範疇に属します。20年近く前、日本はバブル経済社会から抜け出しましたが、今のところどのような社会へ

向かったらよいか迷走しているわけです。そこで、NPO シンプルライフ普及センターでは、持続可能な社会として、それらの中間に位置する楕円形部分の簡素社会（シンプルライフ）へと移行すべきではないかと提案しています。

3. シンプルライフの五箇条

その際、そのような新しい社会へ移行するためにわかり易い指針が必要でしょう。私は「シンプルライフの五箇条」というガイドラインを用意しました。

シンプルライフの五箇条

- 🌲 シンプルライフの原点は感謝や奉仕
- 🌲 シンプルなゆとりと生きがい
- 🌲 スローライフ・ダウンシフト
- 🌲 充実した時空間をつくる
- 🌲 地球環境にもよいエコライフ

具体的には、第1条として、「おかげさま」「もったいない」で代表される感謝や奉仕を挙げています。これはシンプルライフ（＝簡素生活）を考えるときの原点であり、ライフスタイルを考えるときの基本姿勢です。今日は時間の関係で、2条～4条を割愛し、エコライフを志向する食生活の第5条について述べます。食生活等を通じて環境によい居場所は健康にもよいということを実践する項目です。私どもはここに一番ウェイトをかけています。

まず、簡素社会に生きるためには、地球環境の視点から、栄養価のあり方を考慮して低カロリー・ダイエット食に切り替えることです。具体的には図にありますように、環境容量の点から、1人ひとりの栄養価を地球1個分の環境容量で足りるような栄養価に段階的に落としていくライフスタイルをとらねばなりません。

食生活の工夫

a. 地球環境の視点から栄養価のあり方を考慮して低カロリー・ダイエット食に切り替える



b. 食材の選択や献立の工夫によるヘルシーな食生活のすすめ



c. 大量の穀物、エネルギーや水資源を消費する食肉類の献立を見直す

日本の成人男子1日の栄養価を5段階に区切り、向かって右にいくほど適的な評価となるようにしました (a)。年次ごとに人口増となる予測ですから、地球社会が持続可能なレベルにまでスリムであるためには、このようなカロリー制限がかかるのも避けられないところです。

次に、食材の選択や、献立の工夫によるヘルシーな食生活のすすめをしています。いま仮に、和食・洋食・ファーストフードという3種の食事において、同一カロリー（750kcal）のメニューを考えてみましょう (b)。それらの食事を作るにあたって、それぞれの食材を得るのに必要な土地面積を計算し、足してみますと、エコロジカル・フットプリントの考え方をもとにした方法によれば、洋食は和食の4.4倍、ファーストフードは和食の約3倍の土地面積が必要になります。日本人にとって和食のすばらしさが際立っているのではないかと思います。

また、洋食やファストフードの採り方が気になります。たんぱく質摂取のために必要な畜肉は、穀物飼料を不可欠としますが、ほんらい炭水化物として人間が口にできる穀物や水を奪います。また付け合せの野菜なども、温室栽培などで化石エネルギーを必要とします(c)。こうした非効率の見直しのためにも、肉食の献立について工夫が必要になるでしょう。もし私たちが簡素生活をこころざすなら、カロリーだけでなく、食材の選択、料理方法や食べ残しの始末など、多面的に何が家族や地球社会にとって有益であるか、環境や人の健康にやさしいか、食事をとりながらもいっしょに考えていかななくてはならないと思います。

以上、今なぜシンプルライフ社会が必要なのか、その背景理由や豊かさの評価指標、さらにそのような社会は絵にするとどんな社会像なのか、などについて説明しました。

おわりに、私たちがすべきことは、自らのライフスタイルを見直し持続可能な低炭素社会の実現を支援することではないでしょうか。市民あるいは宗教界が実践できるテーマとしては、これが一番身近なテーマだと思います。どうか今後、ご一緒にこの啓蒙・普及活動に参加していただければ幸いです。お金をかけないで今日からでもできる運動です。ご清聴に感謝致します。

総合討論

司 会： 竹村 牧男
パネリスト： 原井 慈鳳
深田伊佐夫
山岡 睦治

司 会 (竹村)： 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました竹村です。これから、今ご発表いただいた方々の討論の時間になっていますが、この会場は最大5時半まで、もう30分もないような状況の中でさせていただきます。あまり十分なことはできないかと思いますが、よろしくお願いします。

今日は、科学者と宗教学者・宗教者、それから研究者と実践の人々、そして異なる宗教の方々が集まり、非常に有意義な集まりになったのではないかと思います。また、多彩な話を次々といただき、本当に多くのことを勉強させていただきました。深く感謝しています。異なる宗教の方がいらしてくださったわけですが、結局、言われていることはほとんど一つのこと、同じことを語られていたのではないかという感想を持ちました。

我々はつながりのいのちの中に生きているというか、むしろ生かされているというか、一体のいのちの中に生かされている自己である。そういうことが宗教の局面では自覚され、そこからおのずと畏敬と感謝、さらにざんげと報恩の心が生まれ、そして小欲知足の実践へとおのずと進まざるを得ない、実践せざるを得ない。それが宗教者の立場であるというような話を、皆さんなされていたのではないかと思います。

さらに、むしろ他者に与える立場、他のいのちに施す立場、そこまで実践していくことになっていくのだというような話だったかと思います。そうしたことが社会運動として、あるいは教団の取り組みとして、あるいは家庭において、さらに個人のライフスタイルにおいて、さまざまなレベルで実現するように、それぞれの方々が実際に実践されているという大変貴重な体験、経験、報告をいただきました。

これからパネラー同士の討論、話し合いになるわけです。お二方が所用でお帰りになって残念ですが、ただいまご発表の時間が15分しかありませんでしたので、どうしてもここだけは補っておきたいということがあれば何かご発言いただきたいと思います。いかがでしょうか。特にありませんか。

それでは、この3名の中ですが、お互いに質問してみたい、もう少しその辺を詳しく聞きたいというようなことがあれば、お互いに質問をしていただければと思うのですが、その辺はいかがでしょう。どなたでも結構です。

深 田： 原井先生にお伺いしたいと思います。私ども立正佼成会は法華経の流れを引いているわけですが、その中で立正安国論の中に出てくる、一つの象徴的な環境観の現れと云えばいいのでしょうか、「環境」に対して立正安国論が一番強調している何かひと言がありましたら、それを教えていただければと思います。よろしくお願いします。

原 井： 安国論は、鎌倉時代の地震災害、飢饉で困窮している民に対し、これはどういう解決方法を持ったらいいのかをお書きになり、法の上から説かれて大変厳しい文言が書かれていると言われています。いろいろな経典を引用してお書きになっている。

その経典自体にかなり厳しい文言が書いてあり、そういう文言をお使いになったので誤解されるところ

もあると思いますが、「汝（なんじ）須（すべから）く一身の安堵を思わば、先ず四表の静謐（せいひつ）を禱らん者か」という素晴らしい一節があります。「あなたが自分の一身の平和を願うならば、自然環境を含めた世界一般の社会が穏やかになることにつとめることであるよ」ということが述べられています。安国論の中ではこの部分が大変それを表しているのではないかと私は思っています。

深 田： どうもありがとうございました。

司 会： ほかに、お互いに何か質問があれば、どうぞ。

山 岡： 生長の家の山岡です。立正佼成会の深田伊佐夫先生にお伺いしたいのですが、立正佼成会は今年の2月にISO14001の認証を取得され、半年たちましたが、実際にISOに取り組んでどういう点がよかったかを少し紹介していただければありがたいと思います。

深 田： 先ほど山岡先生のほうから、立正佼成会の環境方針まで紹介していただき、大変ありがとうございました。まだ取り組んでから月日が浅いというか、じわじわとその効果が出てくる中で、簡単に言うと、今まで知らず知らずのうちに何となく浪費をしていたようなものが、なるほど、こういう使い方もあるのだ。それからまた、資源に対してどういう目を向けたいのかが、何となく、少しずつ分かるようになってきたということが大きな効果だと思います。

もう一つは、最初のころは目くじらを立ててやるというか、ゴミが分別されていないと「誰、こんなゴミの出し方をしたのは」と目くじらを立ててやっていたのが、最近は少し様子が変わってきました。例えば何か環境に対して少しでもいいことをすると、エコポイントを加点する制度があります。

例えば、私どもは100万坪からの大きな境内を持っているので、不法投棄などもよくあるわけです。私をはじめ男性の人たちで不法投棄の処理に行くと、「ああ、またこんな家具なんかを捨ててしょうがない」と思っていたようなことも、処理をすると環境配慮行動ということで、自分たちで点数を決めるわけですが、エコポイントが加算されることが最近分かったわけです。そうすると、いい意味で「ポイントを稼ぐためにもっとゴミを探しにいこう」とか。嫌々やっていたものが、使命感から楽しみのような形に変わってくるということです。

まだまだ年数がというか、月日と言ったほうがいいぐらいに浅いものですから、まだ分からないことが多いのですが、だんだんにそういう、自分たちが環境に対して配慮するのはこんなことなのかなと見えはじめたのが現状だと思います。

司 会： ほかにもしなければ、私のほうからお三方に質問させていただきたいと思います。

まず、原井先生は、題目を唱えているだけではだめだと、かなり踏み込んだ発言をなされまして、現実の世の中を変えるための菩薩行を実践していかなければならないということでした。具体的な菩薩行の内容は、例えば伝統的な大乘仏教では六波羅蜜、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧というような徳目があるわけで、他のいのちに施すのは布施の一つの形でしょう。

そのほか、原井先生が考えられている菩薩行の具体的な内容を、もう少しご説明いただけないでしょうか。

原 井： 私どもは宗教の立場から、心の面から申し上げたわけですが、菩薩行の実践というと、恐らく当宗でも、信心をすること。この環境問題とは別に、仏国土とはそれを信じる人のものだということ。法華経を受持する、この信念で仏国土をつくるのだというのが、大きな柱です。法華経自身が菩薩道の教えだと思っているので、題目を大事に保つ、受持（じゅじ）、読（どく）、誦（じゅ）、解説（げせつ）、書写（しょしゃ）、その中の受持、教えを保つということは中心です。

もう一つは、自分だけが修行して達成されるのではなく、自分が修行したことが自行化他（じぎょうけた）、それがほかに及ばなければ意味がない。だから、いくら自分でこうだと思っても……。御題目を唱える私達は、中心になるのは受持というより、それは前提条件ですから私が申し上げているのは、それをどちらか信心か菩薩行か、右か左かではなく、それを持ちつつ、現実の日常生活は御題目を唱えていれば何をしてもよいのではないのです。起きてから1日には様々な活動をするわけですから、いろいろな100人の人がいたら100人の活動があるのですから、「これだよ」とは言わず、その人その人ができる環境問題を含め、他の命への施しができる活動自身、信心、布施、奉仕を合わせ菩薩行と申し上げているの

です。その上でいろいろな具体的方法があると思います。

特にいま私は子どもの教育。ネット上のいじめが大変多く、いじめのために自殺してしまった子どもがいます。そうしたら、その学校の校長先生が、「それから携帯電話の使い方の講習を学校で始めました」とおっしゃいました。私はそれは間違いだと思います。携帯電話の使い方を勉強するのではなく、やったことがどれほど大変なことかを教育する。私は一つの菩薩行の実践として、学校教育に生き方、他の命につくす教え方が少ないと思います。

空手を習っている人たちが私の話を聞きに本堂へ20～30人集まってきます。以前は電車の「シルバーシート」、いわゆる「優先席を知っていますか」と聞くと、知っている子どもは30人のうち2人でした。それも、聞いたことがあるとか、学校ではそういうことは教えていませんとか。

学校教育は心とは関係ないところの正解を求める教育が主流で、先生方は受験対策とか、いい学校へ行くための教育が主体になると、本筋が違うのではないかと。何のために人は生きているのかを知らない先生が子どもを教えても、子どもは何のために人は生きるのか分からない。だから、いじめをして自殺に追い込んでしまうことがある。先生も子供たちもそういうことに迷っているのです。自然蘇生や他者につくす生き方をぜひ、教育に及ぼし仏教界をはじめ文化教育の立場にある人々と共に社会に発信していきたいというのが具体の一つです。

司 会： ありがとうございます。

次に深田先生ですが、無駄遣いが制度化されたような現代の中で、自然の恵みを自覚し感謝、畏敬の念を持つことが大切ではないか。その感謝の心を養うことが大切だということで、その際に環境倫理、学校教育、家庭生活をポイントに挙げられました。立正佼成会で、環境倫理について何か体系的なものがあるのかどうか、それを仏教の立場からどのようにお考えになっているのか、またそれをどのように信者に教えていらっしゃるのか、その辺をお話しいただきたいと思います。

深 田： 一番端的なものとしては、先ほど生長の家の山岡先生が紹介してくださった環境方針が佼成会としての環境に対するものの考え方になっていると思います。キーワードとしては「すべてのものに仏性」、つまり潜在的にほとけ様になる可能性、そのあるものが一番ふさわしい姿となり、持っているものを発揮できるようなものを目指すこと。あとは多様性ということで、さまざまなものが共に支え合って生きているのだということ。この2点がまず佼成会としての重要なキーワードだと認識しています。

いろいろところでよく言うのですが、「共に」ということをよく佼成会では口にします。この「共に」が今で言うところの「共生」ということや、ある教団では「共生」のことを「ともいき」と表現なさっているところもあるようですが、まさに「共に生きる」ということをいろいろな場面でまず、信者にもお伝えしているということです。

あと、「おかげさま」「ありがとうございます」。これは昔から日本にある言葉ですが、そうしたものを日ごろの生活実践の中で「おかげさま」というような心を、それから「ありがとう」という感謝の気持ちを人に伝えながら、自分に刻み込んでいく。こんなところから、一番身近な実践をまずやっています。

体系化されたということになると、法華経という経典を所依の経典としているので、その中の場面、場面に出てくるさまざまなものの捉え方、考え方があるわけです。その中で特に強調していることは「共に生きる」「おかげさま」「ありがとうございます」に集約できると思います。

あと、「小欲知足」も先ほど出てきましたが、まさにそうした生き方をしていくことが、また生き方としても強調されているというような形です。

司 会： ありがとうございます。大変面白い深い言葉ではないかと思えます。

続いて山岡先生ですが、生長の家がISO14001を取られて教団として大変な取り組みをされていることに感銘を受け、他の教団もぜひまねをされたらいいのではないかと感じましたし、すでに立正佼成会が生長の家に学び、それを実践されているのは本当にすばらしいことではないかと思えます。大変、感銘を受けたわけです。

質問は角度が違いますが、お話の中に「世代間倫理の問題として捉えている」ということがあり、私もまったく同感で、環境問題は自然環境の問題であると同時に未来世代の人々との関係の問題だとも感じ

ています。生長の家で「世代間倫理」をどのようなことを根拠に、どのように考えていらっしゃるのか、その辺をご説明いただければありがたいのですが。

山 岡： 難しい質問をいただきましたが、生長の家の教えは「人間は神の子である」ということが根本になっています。神の子であるのは、自分ひとりが神の子であるわけではなく、すべての人が神性・仏性を宿している神の子である。ですから、今日この会場にいらっしゃる皆さんももちろん宗教者であるのでお分かりでしょうけれども、神性・仏性を宿している神の子であるという信仰を持っています。

皆が神の子ですから「自他は一体である」ということにつながってくるわけです。したがって、私と皆様方とは一体であるという自覚が根本にあります。それを空間的に言うと、全世界の人々と一体である。環境問題の中で言えば、天地の一切のものごと一体であり、先ほど言った「すべては一体である」という考え方です。

それは空間的な捉え方でありまして、これを時間軸で延ばしますと、先祖から、未来に誕生する子孫までもすべてを含めて一体であるという自覚があります。したがって、自他一体の自覚から、世界の人々の飢餓の問題にどう対応するかとか、菩薩行をする、あるいは未来世代の人たちのことを思って自他一体の自覚から行動を起こす。それが今の私どもが環境問題に取り組む根本の考え方になっています。

司 会： ありがとうございます。

私もまったく同感で、一体のいのち、つながりのいのちと言うときに、どうしても空間的にしかイメージしないことが多いのですが、実は時間的にも他者と一体である、そのことの明瞭な自覚が宗教からは出てくるのではないかと思います。それが世代間倫理を支えるのではないかと、ひいては環境問題を支えるのではないかと、常々考えているわけです。

そうこうしているうちにもう 25 分で、時間がほとんどなくなってきましたが、この際、どうしても質問したいという方はいらっしゃいますか。

質 問： 宗教界で取り組みが活発になっている話は大変感激しました。

地球温暖化の危機に、もう一つ大きいことがあり、山本先生の話にありましたが、Geoengineering が実施される可能性がある。これはまだ全然検証されていなくて、硫酸エアロゾルを成層圏にぶち込むような話は割合お金もかからずに、ビル・ゲイツがポケットマネーでやったという話もあります。先ほど菌田先生が、創生論を持つ宗教、キリスト教やイスラム教が正義感を持ってそれをやることのあるのではないかと思います。アラブのどこかの金持ちがお金を出せばできちゃうとか。それに対し WCRP とかその辺の話し合いがあるのか。

もう一つは、経済界からこの声が起こる可能性が一番現実的に強いと思います。例えばスーパー堤防をつくるよりこれのほうがずっと安上がりで、どこか外国がこれに乗り出すと日本の経済界も、競争に遅れるというような話でやりかねない。警鐘されない Geoengineering に対し、宗教界、WCRP で話し合いがあるのかどうか。それをお伺いしたい。

司 会： 私は事情をあまり知りませんが、どなたかお返事できる方はいらっしゃいますか。

深 田： まだ、そうした科学技術を使って天候までを変えてしまうことに対する、いろいろな宗教での話し合いは、現在、私が把握している中ではまだ表には出てきていないようです。天候などはまさに自然の恵みの根本でもあり、ある意味で神様・仏様しか手を触れてはいけないところに人間があえて手を出すというように、どこまでが科学なのか、どこまでが神仏の領域を超えることなのかというような問題だと思います。この辺りのことは、まだ話は出ていません。

よく似たことに生命倫理という問題もあると思います。この辺についてはいま見解が出ているところですが、現在はそのような認識です。ほかの先生方で把握していることがもしありましたら、会場で教えていただきたいと思います。

司 会： どなたか、お返事、ご回答をいただける方はいらっしゃいますか。

山 岡： Geoengineering の根本にある考え方は、自然に対して人間が改変をしていくことであり、自然を支配しようとしていくことにあります。すなわち人間中心主義の考え方であるということです。ですから、この行き着く先は、もう検証されなくても分かっていることであると思います。人間の部分的な知恵で、気

Outline of the Symposium

“Religion and Environment – For the Kyosei of Global Society”

On November 6, 2010 (Saturday), the Research Center for Kyosei Philosophy of Toyo University held the first session of a symposium titled “Religion and Environment – For the Kyosei of Global Society” at Hakusan Campus Building 6 under the joint auspices of Religion/Researchers Eco Initiative. In the symposium, on the basis of an accurate understanding of environmental issues that are drawing attention in today’s world, participants reported their practical efforts toward those issues and discussed what to do proactively to resolve them from the standpoint of religious people.

In his keynote speech, Ryoichi Yamamoto (Professor Emeritus at the University of Tokyo) outlined environmental issues in the world. After that, Minoru Sonoda (Professor Emeritus at Kyoto University, Chief Priest of Chichibu Shrine) introduced the audience to traditional beliefs of the Japanese regarding relationships among deities, people and nature. In a panel discussion titled “What Should Religious People Do Now against Environmental Issues?,” five religious panelists, Jiho Harai (Hokke Buddhism Sect), Isao Hukada (Rissho Kosei Kai), Yoshiharu Yamaoka (Seicho no Ie), Norihiko Koori (Professor Emeritus at Tokushima University, Member of the Anglican Church in Japan), and Kanfu Naito (Simple Life Education Center), reported their respective daily efforts against environmental issues. This is then followed by a discussion among the panelists, with Makio Takemura (President of Toyo University, Chief of Research Center for Kyosei Philosophy) as a moderator.

Ryoichi Yamamoto (Professor Emeritus at the University of Tokyo) gave a presentation titled “Success or Failure of Low Carbon Revolution and Future of Humankind – What Is Expected of Religion” and therein took up global warming as a representative example of the current environmental issues. He then introduced some objective data proving the progress of global warming and other global-scale impacts pertaining to the phenomenon such as famine and thawing of glaciers, warning that if the average temperature of the Earth rises two degrees Celsius compared to the level before the Industrial Revolution, an irreversible “Greenhouse Hell” will break loose. However, even with technology, reform will not go forward unless our mind is focused toward resolving environmental issues. Therefore, the professor expressed hope for religion as the resolution of these issues necessitates spiritual revolution.

Minoru Sonoda (Professor Emeritus at Kyoto University, Chief Priest of Chichibu Shrine) gave a presentation titled “Traditional Japanese View of the Environment – Connections between Deities, People and Nature – ” and introduced the Japanese view of life and nature as an approach toward environmental issues. Shimazono took up the Japanese folkways, the Buddhism-derived belief that in everything resides Buddha, the idea based on Japanese mythology that everything has life, and other aspects of the Japanese mindset. He thereby indicated that the ancient Japanese used to treasure the connections between deities, people and nature, based on the belief that all things possess Buddha in their nature. The professor stressed that it would be the role of religious people to restore such solidarity and spiritual view of life.

Jiho Harai (Hokke Buddhism Sect) gave a presentation titled “What are the Ecological Acts of a Bodhisattva?” Acts of a bodhisattva are performed in pursuit of Sukhavati, a pure land preached in the Lotus Sutra. In modern

terms, they are the process of accepting the deteriorating global environment as a consequence of our past behavior and atoning for that sin. The priest stated that it would be necessary for both Buddhists and scientists to work together and devote themselves to the cause of nature and other lives.

Isao Hukada (Rissho Kosei Kai) gave a presentation titled "How to the Nurture Sprit of Gratitude for Nature" and therein took up the ideas of "Mottainai" and "Itadakimasu," old concepts of gratitude and veneration for nature that have been deep-rooted in Japan since antiquity, in an attempt to counteract the trends in modern society such as mass production/consumption, depletion of resources, and abnormal weather. As examples of pro-environmental behavior, he introduced three perspectives conducive to nurturing the sprit of gratitude for nature: religious value, school education and family life.

Yoshiharu Yamaoka (Seicho no Ie) gave a presentation titled "Certification of ISO14001 to 'Zero Carbon'" and therein reported the introduction of ISO14001 at all the offices of the "Seicho no Ie" religious community in the country. He explained that the introduction helped curb CO2 emissions generated by the community's activities. He then went on to say that a low-carbon society could be realized if other religious communities would also actively exchange information regarding the acquisition of ISO14001 and make efforts toward environmental issues based on their underlying commonality.

Norihiko Koori (Professor Emeritus at Tokushima University, Member of the Anglican Church in Japan) gave a presentation titled "Environment, Global Warming and Energy" and therein indicated that the reduction of carbon dioxide emissions by nuclear power generation, one of the measures to cope with the increasing energy demand in response to the growing global population, entails problems such as the disposal of nuclear waste. Therefore, the professor argued that religious people should be involved in the challenge of decreasing the total energy consumption.

Kanfu Naito (Simple Life Education Center) gave a presentation titled "Recommendation for Sustainable Simple Life" and therein explained that a simple-life society is a sustainable society where people manage resources and energy within the permissible limitations of the global environment. That would be, according to him, the modern version of "desire little; know contentment" – an ideal preached by Buddha. Referring to the simple-life household accounts that he had developed originally for that goal, he advocated taking an approach toward environmental issues from familiar angles such as reviewing repertoires of family meals.

In the discussion, the participants discussed in concrete terms the acts of a bodhisattva presented by Jiho Harai. Moderator Makio Takemura (President of Toyo University, Chief of Research Center for Kyosei Philosophy) pointed out the significance of making active use of diverse environmental concepts that can be found in religious beliefs, as well as the possibility of creating novel approaches through the interaction among a host of religious people and researchers. Finally, the participants concluded the session in the agreement that they would continue holding similar symposiums to explore the path toward *kyosei* with the global environment as well as among religions.

(The above is an abstract: Secretariat Division)